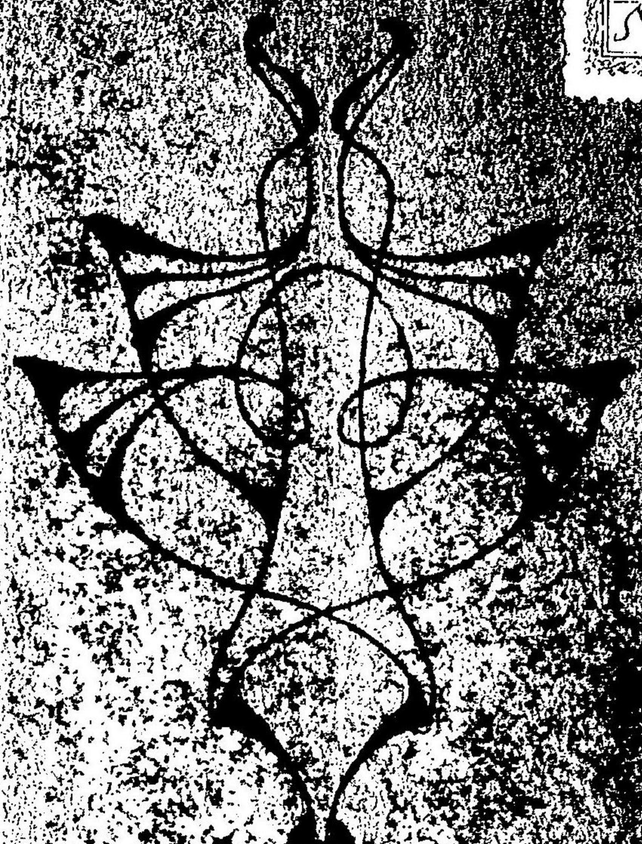
76
S31

民法總則



王伯琦 著

96-53

死後の生活

所蔵
43. 9. 13
内閣

Prof. G. H. Ferguson.

序

今日は科學の時代である、科學萬能ともいふべき時代である。人民皆な科學の知識應用を以て自然界を支配し、地球が藏せる富を披き、地球が畜へたる力を出し、火を使ひ水を制し風を御し、地を縮め時を省き、以て人類の勢力を增し、幸福を進め、富强を計つて居る。國民の興亡、國家の隆替、野蠻文明の差、實に科學の知識之が應用如何に關するといつても差支ない。

然れども科學の支配、物質的文明の裏面には大なる缺陷がある。即ち精神的のそれであつて、大なる不滿足である、自己內の甚だしき不調和である、感情意志の矛盾である、精神の疑惑

である。人々或物を欲するけれども之に接することが出來ぬ、或物を求むるけれども之を得ることが出來ぬ。是に於てか人々皆な其適從する所を知らぬといふ有樣である。かゝる有樣は今日の所謂文明國に一般であつて、歐米のみならず、實に我國の現狀である。

吾人は科學の敎ふる所、科學の與ふる結果を棄つることは出來ぬ。また科學の知識を有し科學心に滿てる近代人は、之と充分の調和一致を缺げる舊來の信仰宗敎そのまゝに依ることも出來ない。吾人は是に於て一の指導者を欲する。然し此指導者は、事實經驗を重んじ、近代の科學を貴びて之に精通し、傳說に依らず、嗜好に驅られず、只だ眞是れ求めて顧みざる獨立自由の精神を有して居る者でなければならぬ。同時に此人は優しき性、溫かき情を有し、敬虔の心を備へ、慈愛に富み、小兒の如く純粹で無邪氣で、詩人的で、宗敎心に充滿する者でなければならぬ。同時にまた、宇宙の謎を善や美の理想が損ぜぬやうに解かんとする人心固有の欲求に對して、深き理解力を有する哲學者でなければならぬ。吾人は此の如き人の指導を欲し、此の如き人の信仰思想を知り、以て吾人が不滿足を治せんと欲して居る。吾人は此の如き人を求めて之をフェヒネルに得た。而して「死後の生活」は、此の如き人の思想信仰を載せたる著述である。

フェヒネルは卓越なる自然科學者であつた、事實經驗を重ん

ずる學者であつた。彼は同時に宗教心に滿ちたる、詩人的性情を有する哲學者であつた。「死後の生活」は諸科學の事實を基とし、歸納比論の兩法を用ゐ、詩的想像を以て之を補ひ、宗教的情緒を帶びたる、未來生活の描寫であつて、正に科學と宗教との靈妙なる融和である。該著はフェヒネルが最初の哲學的努力であつたけれども、彼が哲學の重要なる思想であり、寧ろ彼が哲學の結果ともいふべきものである。而して事實經驗に戻らず、科學の敎と矛盾せぬといふのが、フェヒネルが思想哲學の特色であつて、亦たフェヒネル自身が誇とする所であつた。

「死後の生活」の思想を充分に了解し、公平に評價せんとするには、フェヒネルが全哲學の系統、其根本の思想を知るが必要である、又たフェヒネルが生活を知るも必要である。彼が哲學は彼が生活と密接な關係があるからである。附錄のフェヒネルが生活及び哲學の叙述は、此必要を充さんが爲めに編述したものである。予は讀者が之を諒して附錄の研究も等閑にせざらんことを希望する。

「死後の生活」目次の各章の標題は、譯者が假に作つた所であつて、原著に無いのである。該著に於ては各章の內容は錯雜であつて、容易に簡單なる標題を以て之を示すことは出來ない。故に極めて不完全であり、恐くは蛇足であるかも知れぬけれども、多少讀者に便ならんかと思うて之を添ゆることゝした。

附錄の編述には、重にフェヒネルが誕生百年祭に於けるヰル

ヘルム・ヴントの講演及びフロムマン發行のラスヰィッ著フェヒネルを參考とした。哲學の叙述は殊にヴントに負ふ所が多い、否な寧ろ之が抄譯ともいふべきである。

友人長原止水氏は予が爲めに裝幀の意匠を工夫せられた。原作の内容の美にまた外觀の美を添ゆることを得たるは、止水氏の賜物であつて、予の深く謝する所である。

四十三年八月

譯者誌

死後の生活目次

第一章　總說、生活の三階段……一頁
第二章　來世の體の形成……六頁
第三章　來世の靈の各人に及ぼす薫化……二二頁
第四章　來世の靈の人類に及ぼす勢力……三三頁
第五章　死者との交通……三九頁
第六章　死後他の靈との關係……四九頁
第七章　現世と來世との狀態比較……五六頁
第八章　來世の卓越自由……六八頁
第九章　來世の體の擴張、地球は活物……七六頁

第十章　幽明兩界の門戸、幽靈……九四頁
第十一章　人と神……一〇六頁
第十二章　結　論……一一〇頁

附錄　フェヒネルの生活及哲學

上、フェヒネルの生活
前半の生活、科學時期
一　幼年、學生時代……一一三頁
二　科學研究、奮鬪的生活……一二四頁
三　病　氣……一三九頁
後半の生活、哲學時期
四　哲學的著述、「死後の生活」……一五四頁

五　精神物理學、美學……一六四頁
六　フェヒネルと降神術……一七七頁
七　晩年、爲人、習慣……一八三頁
下、フェヒネルの哲學
一　緒　論……一九二頁
二　生活の起原……二〇五頁
三　意識の成立……二一六頁
四　不死說……二二五頁
五　結　論……二三三頁

死後の生活

フェヒテル著
平田元吉譯

第一章

人が地上に生活するは、一度でない、三度である。第一の生活階段は、絶えざる睡眠である。第二の生活階段は、睡眠と覺醒との交互の生活である。第三は永久の覺醒である。

第一階段に於ては、人は孤獨に闇黒内に生活する。第二階段に於ては、社交的である、而して他人より分離し、他人に隣接し、

他人の間に介在し、事物の表面を照す光線の中に生活する。第三階段に於ては、其生活、他の靈の生活と繼結し、最高の靈の内に於て、高等の生活となり、有限事物の眞相を透見することが出來る。

第一階段に於ては、體は胚種より發達し、第二階段に必要なる機關を構成する。第二階段に於ては、靈が其の胚種より發達し。第三階段に必要なる機關を作成する。第三階段に於ては、神的胚種が發達する。此神的胚種は、各人の靈内に潜在し、既に吾人の世に於ても、豫感、信仰、感情、本能等に依りて、人界を超越し、現世の吾人には陰暗であるが、第三世の靈には白日の如く明なる來世を、吾人に指示するものである。

第一の世より第二の世へ移ることを誕生といふ、第二の世より第三の世へ移ることを死といふ。

第二の世より第三の世に移る道は、第一の世より第二の世に達する道より暗黑なるものでない。後者は外部的に世界を見るに至る道である。前者は世界を内部的に見る道である。

第一の世に於ては、嬰兒は、第二の世の有らゆる光彩音樂に對して、盲であり聾であり、暖かき母體よりの誕生は、難澁であり苦痛である。又た其の誕生の時には、未だ新生活に覺醒せざる以前に、從來の存在の破壞を以て、死であると感ずる瞬間がある。丁度此と同樣に、吾人の全意識が、猶ほ狹き肉躰に束縛せられてある吾人が現今の存在に於ては、吾人は、第三の世の光

彩音樂、其の生活の燦爛自由を毫も知らない、而して彼岸に吾人を導く狹き闇き通路を以て、動もすれば拔けやうのない行きとまり路とする。然しながら、死は只だ一層自由なる存在に至る第二の誕生に過ぎない。此自由なる存在に於ては、靈は其の窮屈なる皮殼を破りて、之を頽敗に委ねしむること、丁度小供が其の第一の誕生に於て、其の胞を破棄するが如くである。

靈が窮屈な形體を棄てた後は、吾人が現在の官能を以てしては、只だ外部的に、言はゞ只だ遠方より近づくを得る事物が、內部的に透徹せられ、完全に感知せらるゝであらう。靈はその時、山野を跋涉せない、春光の駘蕩怡々たるに圍繞せられない、又た萬物只だ外部的であつて全く之を傾すると能はざるを

懊惱することもない。靈は山や野を透徹し、山の堅固さも、野の生長の樂さも感知するであらう。靈は又た言葉や身振で、思想を他人の心に起すの勞を取るの必要がない。靈と靈とは、形體によりて分離せられないで、却て之に依りて結合せられ、相互間の直接の交涉薰化に於て、思想を起すの快があるのである。靈は、現世に殘し置きたる親愛する者に、外部的に現はれずして、其の一部となりて、其の深奧の精神に住し、其の內に在り、且つ其に依り、以て思考行爲するのである。

第二章

嬰兒は母の胎内に在つては、只だ體靈（Körpergeist）即ち其の形體を形成する衝動を有するのみである。嬰兒が發育生長させる四肢機關の形成發達は、其の行爲である。嬰兒は、此等の肢體は、自己の所有であるとの感を有せない。嬰兒は之を使用せず、又た之を使用すること能はぬからである。美しき目、美しき口は、嬰兒には、只だ美しき事物であるのみである、他日之が自己の有益なる部分になるのであるを知らずして、之を作成しつゝあるのである。此等の諸機關は嬰兒が未だ毫も知らざる來世の爲めに作らるゝのである。嬰兒は、只だ母體の有機體

に基ける、嬰兒自身には不可思議なる衝動に依りて、此等の諸機關を出だすのである。

生理學者には、より適切に次の如く言ふことが出來る。嬰兒の構成原理は、（Das Schaffende Princip）其出產以前には、其誕生後、生存を繼續する部分先づ最初は附屬的のもの、即ち作成せらるゝものに在らずして、誕生後、嬰兒が後に殘し、頹敗に委ねしむるものに在ること、猶ほ人の體が其死後に於けるが如くである。故に人は、嬰兒の活動よりして、其繼續として發生するのである。

然れども、嬰兒は第二の生活階段に適する如く成熟し、是まで作成し來た機關を棄擲するや否や、突然自分自身が是まで作成し來た機關が、獨立した活潑なる統一であることが分る。此眼、此耳、此口、今や彼自身のものである。而して最初不可思議なる生得の衝動を以て此等を作成せしも、今は其の重要なる

使用を知り、光線、色彩、音響、香氣、味、感情等の世界が、之が爲めに作られたる機關に依りて、彼の前に現出する。此等の機關が完全であればあるほど、一層能く該世界が現出する。

第一の世が第二の世に於ける關係は、再び第二が世の第三の世に於ける關係に現はれ、しかも此に高潮に達して居る。現世に於ける吾人の有らゆる行爲意志は、來世に於て、吾人の自己として見、自己として使用すべき一有機體を作成せんが爲めである。人が一生中出だしたる、人間界、自然界に行渡れる有らゆる精神的薫化、有らゆる努力の結果、此等は皆既に奥妙なる不可見の紐にて、互に結束せられてある。此等は其生涯中に作成した靈的肢體であつて、相結合して一の靈的體を爲し、絶

えず猶ほ進んで云爲する勢力活動より成る一有機體を爲すのである。而して此等の勢力活動は、分離することが出來ぬやうに、現今の存在にひどく纏結して居るけれども、之を意識すること能はずして、只だ現世を出でた間際に、之を自己の所有と認むるのである。死の瞬間、人が其の現在の活力の依つて以て存ずる機關より別るゝ死の瞬間に於て、忽然として從來の活動の結果となつて、觀念、勢力、効果の彼の世界に繼續し活動する一切を意識し得るであらう。而して此等の繼續し活動する一切は、有機的に一源泉より流出したもゝの如くであつて、自ら其の有機的統一を有して居る。此統一は今まこの死際に當つて活躍として自識し、獨りで活動し、其の個人的自己の權

力を以て、自己の命數に從ひ、人間界及び自然界に云爲するのである。

誰人にても其の生存中、人間界及び自然界に行渡れる觀念の創造、形成、或は保存に貢献したるだけは、是れ彼が不朽の部分であつて、たとひ第二階段に於ける活動力の依つて以て存ずる身體は既に朽ちても、是れだけは猶ほ第三階段に繼續活動するのである。死したる億兆の作成し、行動し、思考したるものは、身と共に亡びない。又た次代の億兆の人の作成し、行動し、思考したものゝ爲めに破壞さるゝこともない、却て次代の億兆の中に繼續し、自ら活潑に一層發展し、次代人の未だ知らざる大目的に向て彼等を驅るのである。

生活の此理想的（無形的）繼續は抽象と思はれ、死人の靈が生者の中に繼續活動するといふことは、空想の如くに思はれ易い。是れ他（ほか）ではない、吾人は、宇宙に充滿し、宇宙に透徹せる第三階段の靈の眞成の存在を覺知する官能を有せぬからである。吾人は、此等の靈の存在が、吾人が存在と結合する點を知るのみである。此結合點は、則ち靈が吾人の中に分入り生長した部分であり、靈が吾人の中に植附けた觀念の形式にて、吾人に現はれる部分である。

水中に投込まれたる石が起す波の圓は、水面に現はれて居る有らゆる石に觸れて、此等の石の周圍に新に波の圓を起す。けれども、最初の波圓は、依然として完全に連續する圓であり、

凡ての他の圓を起し、且つ之を包含する圓である。然れども、水面の石は、只だ大圓の破片を知るばかりである。吾人も丁度此の如き無知の石のやうな者である。只だ吾人は頑たる石とは異り、吾人自身に、皆な吾人の周圍に活動の連續せる圓を起し、その圓は、他の圓の周圍のみならず、又た他の圓の中にも侵入して廣がるのである。

實に人は皆な既に其の生時に、言語、文章、擧動、事業等を以て薫化を及ぼし、他人の精神に入り、其の中に生長するのである。ゲーテの生時には、同時代の幾百萬人が自己の内に、ゲーテが靈の閃光を有して居た。而してこの閃光よりして新に火が燃え出した。奈破倫の生時には、彼が靈の力は殆んど全世界に貫

入した。兩人は死んでも、彼等が世界に出した芽は共に亡びない、只だ現世の枝の萠芽力が亡びたゞけである。此世界に出した芽は、元來一人格より出で、其の總體は亦た一人格を形成して、生長し、發達し、其の最初の現出の如く、同じく内部的なる不可解なる意識を備ふるのである。ゲーテや、シルレルや、ナポレオン、ルテル等は、今も猶ほ吾人の内に、自意識ある、其の死際より一層發達した個人として生存し、吾人が内に在りて思考し行、動し、觀念を起し、進んで猶ほ發展しつゝある。何れも今は窮屈なる體内に閉ぢこめられずして、彼等が生時に敎育し、怡樂を與へ、制御を加へし世界中に貫通し、吾人が彼等に付き知て居る以上の薫化力を有して居る。

後世に引續き生活し活動する偉大なる靈の最大の例は、吾人之を基督に於て見る。基督は其の信者に於て生活すとは、空言でない。眞成の基督敎信者は、譬喩的の意味でなくして、實際に活躍として基督を自己内に有して居る。基督の精神に從ひ、思考し、行動する人は、誰人も基督の一部であるのである。基督の靈は、此の如き人の内にて、思考行動を爲すのであるからである。基督は、彼の體なる敎會の全肢體に貫通し廣がつて居る。凡ては、彼の靈に依りて互に相關聯して居る。丁度林檎が其の樹に於けるが如く、葡萄蔓が其の幹に於けるが如くである。

「體は一にして多くの肢あり。一體の凡の肢は多けれども一の體なり。キリストも亦たかくの如し。」新約全書、哥林多前書第十二章第十二節

只だ最大の靈のみならず、凡ての健全なる人は、無限の精神的創造、薫化、及び其他の諸要素を自己内に包含する自作の有機體を以て、次の世に目が醒むるのである。此有機體は、その人の靈が生存中に活動したことの如何に從ひ、或はより大なる、或はより小なる範圍を充滿し、又た或はより多き、或はより少なき發展力を有するのである。されば此世に於て塵俗卑陋の生活に執着し、只だ物質を動かし、之を養ひ之れを樂ましむることのみに孜々として其の靈を用ゐるものは、次世には、只だ無價値ものとなりて存在するであらう。故に富人も、其の力を用ゐざらんが爲めに、只だその金を消費せば、後ちには貧人とならう。之に反して、貧人も、誠實の暮をせんが爲めにその力を

出さば、後ちには富人とならう。蓋し誰人も、此世に出だしたものは、次世には之を得るであらう。此世にて之を得るの資格あるものが作りたる金のみが、次世には有効である。

吾人が現世の精神生活の不可思議、現世には半ば何の益もなき眞理の探究の欲望、只だ後世の爲めになるべき事業を爲さんとの凡て誠實なる人の努力、現世には何等の不都合も生せざる惡行の爲めに不可探の心配を起す良心後悔の念、此等は、吾人が最少最微の行爲の結果も吾人が自己の分となれる未來世に於ては、凡て如上のものが其の効果を現はすとの豫感より生じたものである。

人は皆な、自己が未來の存在の條件を、自ら作成するのである。是れ造化の偉大なる正義である。人は外部的賞罰に依りて其の行爲に報いられない。基督教、猶太教、其他の異教にて言ふところの普通の意義にては、死後靈魂の行くてふ天國もなければ、地獄もない。靈魂は前方に一躍もせなければ、後方に一退歩もせない、又た寂滅にも陷らない、宇宙の間に四散もせない。靈は死なる大なる厄年の病を經過した後ち、一段高等の存在となり、又た一層高尚の存在とならんが爲めに、猶ほ引きつゞき地上に於て發展するのである。その發展の方法は、段一段と基礎の上に築き上ぐる宇宙の不變なる次序の法則に遵ふのである。故に人々、その行爲の善なり惡なり、高尚なり卑俗なり、勤勉なり懶惰なるに從ひ、次世には或は健全な、或は病弱な、或

は美なる、或は醜なる、或は強き、或は弱き有機躰が、己れが分に落つるのである。現世に於ける人の自己隨意の行爲は、次世に於て、他の靈に對する位置、その運命、猶ほその後の發達に對する傾向能力等を規定するのである。

されば、人は皆な、元氣で誠實でなければならぬ。今ま此處にて徐行するものは、後ち彼處では跛行するであらう。今まその目を開かざるものは、後ちには薄弱なる視力を有するであらう。此世にて詐僞邪惡を行ふ者は、後ち眞實善良の靈に接して起れる己れの不調和を苦痛と感ずるであらう。この苦痛は、彼世に於ても、彼をして惡を改めしめ、此世にて爲せる罪惡を治するの動機となり、且つ最微最後の惡行も贖はるゝに至るまては、彼に休息安寧を與へぬであらう。又た他の靈は、既に久しく神に入りて休息し、神の思想の共有者となり居るに、自分は猶ほ地上に憂鬱と無常の裏に流轉し、彼が精神の病は、謬見迷信を以て人を惱まし、惡業愚行に人を誘導するであらう。又た彼自身は、第三の世に於て完全の域に至らんとする路上に、遲々として後れ殘ると同時に、彼が引きつゞいて其の中に住する他人をも、之が第二の世より第三の世へ行く路上に引止めて、進ましめぬであらう。

虛僞、邪惡、卑俗が如何に長く繼續し、其の存在の爲め、眞實、善美、正義と如何に鬪爭しても、遂には此後者が絶えず增長する勢力の爲めに征服せられ、又た自己の行爲より生ずる反動的

結果の增加に依りて、自ら破滅に陷り、遂には有らゆる虛僞、有らゆる邪惡、人心中の有らゆる汚穢は、之が微塵だも留めざるに至るであらう。只だ彼の眞善美なるものだけが、吾人人間の永久不死の部分である。只だ之が芥種(からしのたね)ほど人に在つても——是の毫もない人はなからん——第三の世に於ける只だ惡をのみ苦しむる消罪火に依りて、該善種子は、其の剏や糠をば燃かれ淨められ、たとひ遲くはあつても、遂には立派なる木に生長することが出來るであらう。

爾等此世に於て、その靈が、悲哀と懊惱とに依りて鍛錬はれたる者は喜ぶべし。爾等がその進步の妨碍に對して勇ましく奮鬪し、その際に得たる鍛錬は、爾等の利益となり、而して一層丈夫に新しき存在に生れて、爾等の運命が此世にては逸せしめたものを、一層迅速に、一層愉快に恢復するであらう。

第三章

人は一の目的の爲めに多くの手段を用ゐる。神は多くの目的に一の手段を用ゐる。

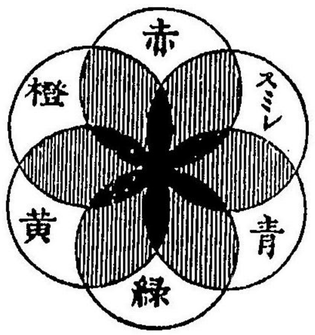
植物は以爲らく、吾れ只だ我が爲めに此に在り、生長せんが爲め、風に動搖(ゆらつ)かんが爲め、光と空氣を吸入せんが爲め、自分の飾に芳香と彩色とを作らんが爲め、甲蟲や蜂と遊ばんが爲めに此に在りと。植物固よりそれ自身の爲めに其處(そこ)に存在する。然れども同時に、植物は地球の氣孔であり、光線、空氣、及び水が此に會合し、相纏結して作用を生ずるのであつて、全地球の生活に緊要缺くべからざるものである。植物は地球の爲めに蒸

發し、吸入し、地球に綠衣を織り、人類及び動物に、食物、衣服、溫暖の材料を供給する爲めに其處に在るのである。

人は以爲らく、吾れ只だ我が爲めに此處に在り、樂まんが爲め、自分の肉體的精神的生長の爲めに活動創造せんが爲めに此處に在りと。人固より彼自身の爲めに其處に在るのである、然れども同時に、彼の身體及び精神は、より高等なる他の靈の住家であつて、此等の靈は、此住家の內に入り、結合し、發展し、相互に諸種の作用を起すのである。而して此作用は、同時に人の感情思想であつて、第三の世に對して、一層高き意義を有するのである。

人の靈は、その自己の所有たると同時に、此等の高等なる靈

の所有であつて、何れのものに屬するとも區別することは出來ない。故に人の精神内の作用は、同時に兩方に屬するのであるが、その屬する方法は異るのである。



丁度此圖に於て――此圖は模寫でなくして、象標或は比喩のつもりである――中央の諸種の色(現圖にては黑色)の六の射光にて成る星形は、内部的統一ある獨立のものと見ることが出來る。而して其の射光は皆な其中心に從屬し、之に依りて統一的に結合されて居る。然れども他方より見れば、此等の射光は、皆な夫れ〳〵、自己の統一を有する六種の單色の圖の結合より成りたる如く思はれ、各射光は自己に屬すると同時に、此射光の依りて以て生ずる交錯する圓にも屬するのである。人間の靈に於ても、丁度此の如くである。

人は往々その思想の何處より來れるかを知らぬことがある。只だ偶然或るものを思ひつくことがある。自己のどうしても説明することの出來ない憧憬、疑念、或は快活等が身を襲ふて到ることがある。又た何等の理由を知らずして、或る力が活動に吾人を鼓舞し、或は或る聲が或る事を爲さゞらんことを吾人に警告することがある。是等は他靈の然らしむる所であつて、吾人自己の中點より異なりたる點より、他の靈が吾人の内に入りて思考し、吾人の内に入りて活動するのである。他靈の吾人内に於ける活動薫化は、睡遊精神病等の常規外の狀態

の場合に於て一層明瞭である。此の如き異常時に於ては、他靈と吾人との相互的相關的關係は、他靈の爲めに有利となり、吾人は只だ受動的となつて、彼等より吾人に流出するものを受くるのみであり、吾等より彼等への反動がないのである。

然れども、人間の靈は、これが覺醒してあり健全である以上は、縱令他靈が自己的に侵入生長し、或は自己の靈と纏結して生長しても、他靈から勝手にせらるゝ玩弄物、又たその產物でもない。健全なる人間の精神は、丁度此等の諸靈の結合者、精神的引力の充滿する活潑々地の中心點である。此中心點に於て、皆のものが輻輳會合し、互に交通して思想を生ずるのである。人靈は、もと、他の諸靈の會合に依りて生じたものでなくして、人間のその固有の所屬として、最初より附與せられたるものである。自由意志、自己規定、自意識、理性、凡ての精神的能力の基礎等皆な人靈に包含せられてあるのである。然しながら、此等は皆な人の生るゝ際には、未だ萠芽せぬ胚種の如くに、內に潛伏して在つて、活潑々地の個人的實際に充滿せる有機體に發達せんことを俟ちつゝあるのである。人の此世に生るゝや、他の靈は直に之を覺りて、四方より推し寄せ、自己の勢力を强大ならしめんが爲め、新靈の力をして、自己の力たらしめんことを努むる。然れども、他靈が之を遂ぐると同時に、人靈の勢力も增加し、その發達の資を得るのである。

人心に入りて生長したる客靈は、異なりたる方法ではある

けれども、人靈の他靈に於ける如くに、人間の意志の感化に從ふべきものである。他靈が人の內部を規定し、薰化することが出來るやうに、人はまたその自己の靈的存在の中心よりして、自己內に結合して居る他靈內に新に事物を起すことが出來る。然れども圓滿に發達したる靈的生活に於ては、何れの方よりも、他の方に對して、充分の勢力感化力を有せない。凡て客靈は、只だその一小部分を個人と共有するから、個人の意志は、殘餘の大部分が人間以外に存ずる客靈に對しては、單に一小感化しか與ふることは出來ない。之と反對に、凡て人靈は、自己內に頗る雜多な客靈を宿すからして、一客靈の意志は全人靈には、また單に一小刺戟しか與ふることが出來ない。但し、若し人

にして、自ら好んで、一身を擧げて他靈に委ねば、他靈を制するの力を失ふのであらう。

凡ての靈差別なく、同一の人靈內に結合調和することは出來ない。故に人靈を占領せんが爲め、善靈惡靈、眞靈僞靈、互に相爭ひ、その爭に勝つものが人靈を占領する。吾人が往々經驗する內部的鬪爭は、吾人の意志理性、一言せば吾人の內界を、自己の有にせんとする客靈の鬪爭に外ならぬのである。吾人は自己內に宿れる諸靈の一致を、自己の平和、淸朗、調和、安寧として感じ、彼等の鬪爭を、內心の不安、疑惑、動搖、困雜、不和として感ずる。然れども、吾人は此鬪爭に於て、より强き靈に供せられたる奮鬪なき、或は遲鈍なる犧牲ではない。吾人は、自己の中心に於

て混々として盡きざるその固有の活潑なる力を以て、自分の方に引寄せんとする闘爭者の眞中に立ち、自己の欲する方に加勢し、時には强者に對して弱者を助け、以て之に勝利を得せしむることも出來る。故に人自身は、彼にして、その力の本來の自由を保持し、之を使用するを倦まざる以上は、靈の戰鬪の眞中に在りて、何の危險もなく、晏然として之に居ることが出來る。人屢々惡魔の捕ふる所となるは、その內部よりの力の發展が、倦怠に妨げらるゝが故である。故に惡となるには、只だ懶惰倦怠にて充分なることが、往々にしてある。

人善なれば善なるほど、一層善になり易く、惡なれば惡なるほど、腐敗に歸し易い。その故はかうである。善人は自己中に善靈を集むること多く、而して此等善靈は、彼と提携して、殘留の惡靈、また新におし寄する惡靈を追掃ひ、且つ彼が內部よりの努力を助成するからである。善人は勞なくして善を爲し、彼が諸靈、また彼が爲めに之を爲る。惡人は先づその內部の力を以て、彼が善行に反對する凡ての惡靈の氣を奪ひ、之を征服せねばならぬ。

類は類を求めて之と親み、强ひられざれば、自分と反對の性質のものより遠ざかる。吾人が內の善靈は、吾人が外の善靈を招ぎ、吾人內の惡靈は、吾人外の惡靈を招ぐ、純粹の靈は、好んで純粹の靈に入り、吾人外の惡靈は、吾人內の惡靈を捕捉する。善靈先づ吾人が靈內に優力なれば、內に潛み殘れる最後の惡魔

も自ら直に逃去る。惡魔は善靈の中には居心好からず。故に善人の靈は、神聖なる靈に取りては、純清なる天の棲家であるのである。然れども善靈と雖も、優勢なる惡魔に對し苦戰し、到底人靈を得るの見込なき時は、之を全く惡魔に委ぬるのである。然るときは、人靈は終に地獄となり、地獄に陷りたるものゝ苛責に適したる場所となる。蓋し惡人の精神に於ける良心の苦痛、その懊惱不安は、單に此惡人の靈が感ずる苦痛のみでなく、その中の惡靈が一層の痛切を以て感ずる苦痛であるのである。

第四章

高等の靈は、個人に宿るのみならず、その各自が、幾人にも分れて宿るからして、或は信仰にあれ、或は眞理にあれ、或は道德的努力であれ、或は政治的努力であれ、とにかく精神的に、此等の人々を結合するのは、此等高等の靈である。凡て相互に、何か精神的共通を有する人々は、同一の躰に屬し、而してその躰に屬する肢の如く、此靈より出でゝ彼等に入りたる觀念に從順するのである。ときとしては、一觀念が、一緒に全國民内に宿ることがある、時には、一群の人が、一事業に皷舞せらるゝことがある。是れ偉大なる勢力の靈が、彼等を襲ひ、疫病の如くに、彼等

皆の中に透入したのである。かやうな人心の總攬は、死人の靈之を爲すのみならず、又た無數の新觀念は、現存者よりして、現存者に感化を及ぼすのである。然れども、凡て生存者が世界に送出す觀念は、彼が未來の精神的有機躰の肢であるのである。

二個の類似の靈が、人間界に於て相會逢し、その共同の要素にて、互に相纏結して生長し、その異種の要素に依りて、互に相薫染し豐富ならしめば、此に彼等が最初個々別々に宿つた社會、人種國民等は、また同時に、精神的共通を有し、その精神的財産を以て、相互に富ましむるのである。故に第三階段の靈的生活が人間界に發達することは、離るべからざる關係を以て、人類の發達進歩と相伴ふものである。社會國家、通商貿易の徐々たる發達、科學藝術の進歩、又た此等人世の諸範圍、益々發展して大となり、諸肢調和せる有機躰に至る等、此等は皆な、人類界に生活活動する無數の靈的個躰が集合生長して、一層偉大なる精神的有機躰となつた結果に外ならぬのである。

然らば、中心を見ては周圍を見ず、周圍を見ては中心を見ざるが如き近眼的個人の混沌たる我利的行爲よりして、上述の如き宏大なる人生の諸範圍が、千古不易の觀念に從ひ發展すとは、頗る怪むべきことではなからうか。是れ則ち、明白に達觀する高等の靈があつて、隅から隅まで、此仕懸を動かし、皆な自ら共同の神的中心に推寄せ、彼等の神的要素を以て相融合し、彼等が宿り働ける人間をも、高尚なる目的に連れ行くからで

ある。

互に親善なる諸靈の調和の外に、性質相反する諸靈の鬪爭がある。この鬪爭に於ては、凡て卑俗的のつまらぬものは磨滅せられ、永久のものゝみが、その純清を持して殘留するのである。此鬪爭の痕跡は、人類界にも之を觀ることが出來る。即ち諸種の組織の爭、宗派の憎惡、帝王或は國民間の戰爭謀反の如きが是れである。

人間の多數は、盲目的な信仰、盲目的な從順、盲目的な憎惡、盲目的な暴怒を以て、此等の大仕懸の精神的運動に躍込む。彼等は、自己の靈の眼を以て見ない、自己の靈の耳を以て聽かない、彼等は彼等の知らざる目的の方へ、他靈より驅りたてらるゝのである。彼等は宛然群羊の如く、高等の靈の鞭に驅られ、奴隷、死、有らゆる恐ろしき難澁の中を行くも辭せぬのである。

同時に又た明瞭なる意識と、精神の獨立とを以て行動指導しつゝ、此偉大なる運動の渦中に入るものがある。然れども、彼等も豫定の大目的に對する有意的方便に過ぎない。彼等は、固より、その自由なる行動により、運動の方法速度を規定することが出來るけれども、其の結局の目的を如何ともすることは出來ぬ。自分の生活する現在の精神的傾向を察し、その自由なる行爲思考を該傾向に嚮くるものゝみが、世界に於て偉業を爲すことが出來る。該傾向に反するものは、一樣に偉大なる人物であつても、覆滅する。最良の目的を定め、之に達する最良の

道を知る靈(神)は、前者の如き人物を撰出して、その活動力の新中心點たらしむるのである。此の如き人物は、盲目的な道具でなくして、自己の刺戟、自己の理智よりして、該靈の正義と、賢智とに有益ならんとするのである。善く事業を果たすものは、鞭笞を加へらるゝ奴隷でない。現世で神の爲めに働いた者は、來世に於ては、神の支配に與り、以て現世の事業を繼續遂行するであらう。

第五章

死人の靈と生者の靈とが、幾多の折に相知らずして逢ふことがあらう。又た幾多の折に、只だ一方からのみ知りて、相逢ふことがあらう。誰人も、よく兩者の交際を跡ね、之を究むることは出來ぬ。吾人は、只だ簡單にかく言ふのである、即ち、靈の相逢ふと謂ふのは、互に意識を以て相逢ふの意である、死人の現存と謂ふのは、死人が意識を以て、其處に在るの謂である。

死者と生者との、意識ある逢會の一手段がある。是は、生者が死人を憶ふことである。死者に注意を向くるといふことは、丁度生きて居る人に加へた一刺戟が、この刺戟を加へた處へ、そ

の人の注意を向くる如くに、吾人に對する死人の注意を呼起すことである。

吾人が故人を憶ふといふことは、故人が現世に自意識の生活を有する結果であり、吾人の意識内に現はれたる、それの反動的の結果であるのである。然れども、來世の生活は、現世の生活の結果より成れるものである。

生者が生者を思ふ時も、思はれる人の意識に一刺戟があらう。然れども、何等の手答のないのは、思はれた人の意識は、全然窮屈なる肉體の束縛内にあるからである。死して以て此束縛を脱却したる意識は、その自己の至るべき處を求め、自分の上に加へられた刺戟に從ひ、加へられた刺戟が、前以て頻繁で、且つ強ければ、それだけ之に從ふこと容易で、且つ強くあるのである。

凡て有形的の一打撃は、打つものも、打たれるものも、兩つながら之を感ずる如くに、故人を思ふて起れる意識の打撃は、思ふものよりも、思はれるものよりも、兩つなから感ぜらるゝのである。吾人が先方の意識を覺らずして、只だ此方の意識のみ打撃を有効と思ふは、誤れるものである。此誤謬は、その結果として、必ず他の誤謬や疎略を生ずるのである。

戀人はその戀しき人を奪はれ、夫はその妻を奪はれ、兒はその母を奪はる。彼等その裂き持行かれたる命を、遠き天に求むるも甲斐なし。虚空を白眼み、虚空に手を延すも甲斐なし。彼等

の戀慕へるもの、實は彼等より裂き奪はれたるのでない、只だ外部的交通の緒が絶えたばかりである、兩方が互に了解した外部的官能に依れる間接の交通が、內部的官能に依れる內部的直接的交通になつただけである。彼等はまだ此內部的交通を了解するを學ばなかつただけである。

予は嘗て、母がその小供を自分の腕に抱いて居りながら、心配して、家や庭を尋ねまわつて居るのを見たことがある。死者を遠方の虛空に求むるの誤は、之より一層大である。之を求むるには、只だ自己の內心を見れば宜いのである。母が、その內心に兒を有たぬのに、外部的に腕に之を有ちたとて、全く之を有つたと謂へるであらうか。外部的交通の便利、即ち外部的言語、外部的顏容、外部的鞠養は、之を受け、之を與ふることは出來ないけれども、內部的交通の便利は、之を受け之を與ふることが出來る。只だ內部的交通、この交通の便利あることを知りさへすれば宜いのである。此處に居らぬと思へる人と、話すこともなければ、握手することもない。只だ諸君が、此等のことをよく辨へば、故人と生者との新生活が開始せらるゝのである。同時に、死者も生者も、同じく利益を受くるであらう。

只だ熱心に死者を思へ、さすれば、死者の思想だけでなく、死者自身が、直に其處に在るのである。諸君は、只だ內部的に彼を招げ、彼は必ず來るに相違ない。彼を止め、彼は止まるに相違ない。只だ熱心に、一心不亂に彼を思ふのが肝要である。彼を思ふ

に愛或は憎を以てせよ、彼は必ず之を覺るであらう。愛や憎が、強ければ強いだけ、彼が之を覺知することが強い。是まで諸君は、故人の回想を有して居つたらうが、今は之を用ゐることを知つて居る。今後は、諸君が故人を憶ふことに依つて、之に幸福を與ふることも出來、又た之を惱ますことも出來る。兩方共に識りつゝ、彼と和睦することも出來れば、彼と腹心の敵となることも出來る。故に、常に善き心懸を以て之を爲せ。而してまた諸君の殘す回想も、他日諸君自身の爲めになるものなるを忘れてはならぬ。

死後他人の記憶に、愛慕、尊敬、崇拜、嘆稱等を殘すものは幸福である。現世の爲めに盡したものは死後之を得るのである。是れ彼が、後の人が彼に關して思へる凡てを意識するからである。生前には、只だ僅に粒を數へた穀物を、死後は、其の俵を得るであらう。是れ實に、吾人が天國の爲めに畜ふべき財産である。

呪咀、怖ろしき記憶の附き纏ふた人こそ不幸である。此世にて彼につき纏ふたものは、死しても彼につき纏ふのである。是れ實に彼を俟つ地獄の一部分である。彼の後より呼びかけられたる悲痛の叫は、彼が身内を貫く射られたる矢の如くなるのである。

正義(正當の裁判、賞罰)は、善惡が招げる結果の總體を檢べて行はれるのである。蓋し此世にて誤解された正直の人は、猶ほ彼世に在つても、災殃を惱むが如くに、之よりして難澁するで

あらう。又た不當の名譽は、不正の人に、外部的善として附與せらるゝであらう。故に諸君は、現世に於て、出來るだけ、その名の清からんことを努めなければならぬ。「燈を燃して斗の下においてはならぬ。」（新約全書馬太傳第十五章第十六章參照。善行を他人に示せの意―譯者）然れども、次世の靈の間には、誤解なるものはない。此世で間違つて秤られても、次世には直され、秤衡の他方に餘る重さが加へらるゝ。天の裁判は、遂には、凡て地上の不公平に勝つのである。

死者の記念を起すものは、死者を此處へ呼ぶの方便である。死者は、吾人が之に施せる祭に現はれ、吾人が彼等に建てたる像の周圍に髣髴し、その行爲を贊する歌に傾聽する。新藝術の萠芽も此に胚胎する。藝術は既に老ひ、何時も同じく舊劇を

舊觀者の前に演ずるを飽いて居る。今は突然舊來の觀者の居る下層の土間の上に、之を見卸す上層の觀者が出來た。今後は藝術の最高の目的は、此上層の人を樂ますことである。然れども、下層の人も、この上層の者の喜ぶところを喜ぶべきである。

上層の觀者は即ち他界の靈である。新藝術は、此等他界の靈を樂ますを、最高の目的とすべきものである。之と同時に、下層即ち現在の吾人を喜ばすのである。一言せば、新藝術は共感化の範圍目的が大となるの意かー譯者

嘲弄者は嘲弄し、教會は相鬩く。一は以て背理なりとなし、他は以て理以上なりとして居る。是れ一秘密であつて、兩者の毫も覺る能はざる幽玄の秘密である。然れども、一旦この幽玄を披けば、嘲弄者の理性の悟る能はざるもの、教會擧つて見を同うするも終に及ぶ能はざるもの、簡單明瞭、掌を指すが如くに

なる。蓋し彼等が見て以て、凡ての法則の例外、或は法則以上となすものが、是れ最も廣き法則の一大例である。

基督は、その聖餐に於て、單に粉と水とより成りたる體にて、信者に入るのではない。基督を思ふて之を受けよ。然らば、基督はその思想を以て、單に汝の身近くに在るのみならず、又た汝の身中に入らん。彼を考ふること多ければ、彼は多々益々汝の中に在らん。彼を考ふること強ければ、彼は益々強き力を以て汝を強くせん。然れども、若し彼を考へざれば、聖餐は、只だ普通の麵包と葡萄酒とに過ぎない。

第六章

死後人が現世に於て最も愛した人と會ひ、之と交通し、從來の關係を新にしやうとの、皆人が抱いて居る切望は、豫想希望して居たよりも、一層完全に遂げらるゝのである。

此世に於て精神的要素が共通であつたが爲めに結合した人々は、次世に互に相逢ふのみでなく、此要素に依りて、一體となり生長するのである。該要素は、彼等に取りては、共同な精神的肢となり、而してこの肢は、兩者が一樣に意識を以て、自分の有とするのである。

生者が相互間に於けるが如く、死者は生者と、上述の如き無

數の共同の肢に依りて、互に相纏ひて生長して居る。然れども死が來て、生者の靈を纏へる肉體の紐を解いてくるれば、こゝに初て、此兩者の結合の意識が、既に實際に結合して居た意識に上るのである。

誰人もその死際には、その靈が既に前に死んだ人より受けしもの、或は之と共同に有したものは、依然として此等故人の靈にも屬することを認むるであらう。故に彼は全くの異客として第三世に入るのではない。彼は現世にて信仰、知識、愛情の共同なるが爲め、彼が結合した皆人は、久しく彼を俟てる如く、喜んで迎へ、自分等の内のものゝ如くに彼を援くであらう。

吾人は、既に昔し第二世を通過した古の偉人、吾人その人の言行に依り吾人の精神を養ひたる古の偉人とも、同じく親密なる間柄となるであらう。故に此世にて、全く基督の中に住するものは、彼世にても、全く基督の中に在るであらう。然し彼の個人性は、一層高尚の個人性の中に在りても消失せない。只だ此の中に在りて己の力を增加し、同時に、此方よりして先方の力を強くするであらう。類似の要素の爲めに、互に食ひ入つて生長したる靈は、何れも皆な他の力を自分のものとなし、同時に、この類似の要素と相繋がれる異種の要素にて、互に規定感化するのである。

此の如くであつて、或る靈は、その本質の大部分を以て相互に強くする。或る靈は、個々の相一致する要素あるが爲め、只だ

結合するのみである。

精神的要素の共同なることに基ける此等の結合は、皆な悉く永續するのでなくして、眞善美の要素を有するものゝみが永續するであらう。

自己内に永久的調和の要素を有せないものは、縱令此世以後に暫時は續いても、皆な後には朽ちて、一時つまらぬ結合をして居た靈の分離を生ずるであらう。

現世にて發展して、次世までも吾人が持行く精神的要素は、其の多くは、固より自己内に眞善美の核を有するのである、然れども同時に、虛僞、背戻、腐敗等の取るに足らざる、餘計な物にて蔽はれてあるのである。此の如き精神的要素にて結合され

たる靈は、永く結合してあることもあれば、又た分離することもある。即ち靈は、善なるものは、之を内に留めて離さず、惡なるものは、その別るゝ、惡魔に委ね、或は善靈は善を執り、惡靈は惡を執るのであるからである。

永久に純粹なる眞善美の一形式、一觀念を互に共同して有する諸靈は、此に依り結合せられて永久に住(とゞま)り、且つ同しく自己の一部として永久に調和して之を所有するであらう。

高等なる靈が、永久の觀念を捕捉することは、該靈がこの觀念に依りて、一層偉大なる精神的有機體に結合生長することである。凡て各個の觀念は、一般の觀念に根抵し、一般の觀念は、一層廣き觀念に根抵すると同樣に、凡ての靈は、終には肢とし

て、最大の靈、即ち神と結合するであらう。

靈界は、之が完成せば、靈の集合でなくして、靈の樹である、而して、其の根は現世に入り、其の頂は天に達して居る。只だ最大最高の靈、基督、諸の天才、聖者の如きが、その質の最良の部分を以て、神の內部の高さに生長し達することが出來るのである。之より小さき低き靈は、小枝の大枝に於けるが如く、大枝の幹に於けるが如く、如上の偉大なる靈に根ざし、此等の媒介に依り、間接に最高の最高なるものに連なるのである。

逝ける天才や聖者は、神と人との眞成の媒介者である。彼等は同時に、神の觀念を與有して、之を人間に通じ、而してまた人間の苦惱、喜悅、希望を感じて、之を神に通ずるのである。

宗教の初に於ては、死者の崇拜と、自然を神として之を崇拜することゝは、密接の關係を有し、半ば同一であつた。野蠻人はこの崇拜の多を有し、文明人は之の高を有して居る。今日とても、該崇拜の大斷片を、その重要なるものとして保存せぬ宗教が、何處に在らうぞ。

故に、市には、皆な之に屬する偉大なる故人の殿堂があつて然かるべきである。而して此殿堂は、神の殿堂の傍に、或はその內に建てらるべきである。同時に基督は、在來の通り、神自身と同處に拜まるべきである。

第七章

われら今鏡を以て見るところ昏然なり。然ど彼の時には面を對せて相見ん。
我いま知ること全からず。然ど彼の時には我が知らるゝ如く我しらん。
新約全書、哥林多前書第十三章第十二節

人はこの世に於ては、外部的と內部的との兩生活を有して居る。外部的生活は、顏容、言語、文章、事業行爲等であつて、皆人に明亮であり、皆人の知り得べきものである。この皆人が見ることを得る生活が、外部的世界へ入り續くも、是は容易に之を跡ぬることが出來る。不可見の生活の續きは、矢張不可見である。されども無いのではない。吾人は外部的生活を送ると同時に、內部的生活を吾人生活の核として、この世を持越え、以て來世

の核を作るべきである。

實際に、生存中、人より出でゝ、他の生存者が之を見、之を跡ぬることを得るものは、此人より出た一切を網羅せない。吾人が腦中に於ける意識の一運動の傳はる振動は、如何に微妙であつても、凡て意識の運動は吾人が腦中の內部的運動にて傳へらるゝのである。吾人が中に、最後は吾人以外に、同種類の何等かの作用を生ぜずば、消失することが出來ない。只だ吾人之を外部世界に跡づけることが出來ないだけである。笛はその音を自分だけに留むることが出來ない、必ず自分以外に傳へるのである。吾人が腦も、その活動を自己內にのみ止め得ないで、該活動は其れ以外に漏れるのである。笛や腦が、自分に有して

居るのは、只だ最も接近のものゝみである。

源を吾人が腦中に發したる極て複雜なる高等の振動が、吾人が耳目の覺ることの出來る粗笨劣等なる振動の上に廣がることがある。丁度池水の最も細微なる漣波が、大波の上を廣がる如くである。又た模樣繪が厚き縫取ある絨氈の表面に廣がつてある如くである、而してこの絨氈は、實に此模樣にて、その美と價値とを有するのである。物理學者は、外部の劣等の振動を認め、之を究むるけれども、彼等が知らざる微妙なる振動は、毫も之を顧みない、之を認めぬにしても、既にその原理を知れば、その結果を否定してはならない。

神經の活動を、化學的作用に歸するも、或は電氣的作用に歸するも、とにかく、是は極微の振動に依る。少なくとも、極微によりて起され、或は極微より導かるゝものとせねばならぬ。尤もこの場合には、重さの秤るべからざる物質が、秤り得べきものより重要であらう。振動は周圍に廣がるに從て、一見消失する如く思はれやう。若しくは、振動が、その活力の推移の爲め、一時、所謂緊張(Spannkraft)に變化すとも、勢力保存の原理に從ひ、何等かの形にて、活動の恢復を俟つであらう。

靈が現世に於ける覺知し得べき外部的生活の作用にて、吾人に及ぼした感化だけにては、決して靈の全存在を盡したものではない。靈の性質には、此外部的の外に、吾人の知るべからざる方法にて、靈の主要部分たる內部的要素が存在するのである。若し人ありて荒涼たる無人島に生活し、他人の生活に感化を及ぼすことなくしてその生を終るも、彼は猶ほ此世にて他人との交際なかつた爲めに得なかつた發展は、之を未來に

期しつゝ、その本質に從つて續いて生活するであらう。

之と同じく、嬰兒生れて直に死するも、決して永久に死したのではない。一瞬間にても、意識の生活があれば、その周圍に、その感化の圏を畫するのである。丁度極めて短かき音響、只だ一瞬間で消えたと思はれる音響も、傍に立つて聽て居る人を越えて、無窮に音を送くる波動を起すのと一般である。如何なる活動も、自己内に消失することはない、何れも同種類の新しき影響を永久に生ずるのである。嬰兒の靈も、無人島に孤獨に暮した人の靈と同樣に、其の寸時の意識生活よりして發展するであらう。只だその方法が、既に多く發展した者の發展するに異なるだけである。

人は死に於て初て、生時に他人の靈に產じたものを、充分に自覺してなるやうに、又た是まで自己内に成したものを、また死に於て充分に自覺し、且つ之が用法を知るやうになるのである。彼がその生時に、精神的寶庫に集めたもの、その記憶に滿たしたもの、彼が感情に浸潤せしもの、彼が理性、彼が想像力の作りしもの、是等は皆な永久に彼が有として存在するであらう。然し凡て此等の連絡關係は、現世にては不明であつて、吾人は之を知ることが出來ない、只だ思考が、その炳たる燈火を以て、此中を通過し、その進んで行く狹道に在るものを照らすのみであつて、他は窈然として暗いのである。靈は現世にては、決して一偖に其自身の全内容を知ることは出來ない。只だその

一要素が他要素を招いて結合し、以て一時暗黒から出づるけれども、直に元のまゝに闇黒に沈むのである。然れば、人は自己の靈中に於ける知らない客である、偶然に從ひ迷ひ歩くのである、或は而側にも、推論の紐を辿りて、その道を求めて居る、而して思想なる燈より離れて、靈の廣野を蔽へる闇黒內に潛屈する資を、往々にして逸することがある。然れども、死の瞬間には、永久の夜が肉體の眼を蔽ふけれども、靈に於ては白日が明け初むるのである。その時には、內部的人間の中心點が、太陽の如くに燃え、以て自己內の一切の靈的のものを照らし、同時に內部的眼にて、超世界的明晣を以て、事物を透徹し見るであらう。現世にて、忘れた一切を、此に再び見出すのである、否な、次世にて彼が前に現はれんが爲めに、此の世にては忘るゝのである。この忘れたものは、皆一切此に集合せられて見らるゝのであらう。この新しき普遍的明瞭の爲めに、彼れが今やその結合せんとするものを、煩はしく集むるを須ゐない、その區別せんとするものを、その特性に從て分類するを須ゐない。只だ一目して、自己內の一切同時に觀せられ、一致矛盾の關係、結合分離、調和不調和の關係、單に思考の馳する一方向のみならず、同時に、有らゆる連絡方面が分明に爲るのである。（覺醒判、溺死、睡遊等にて、死に近ける時に、上述の如く、精神の內容が明瞭に近づく例あり。）飛鳥の翺翔と視力とは、自己の鈍き歩行中觸るゝものゝ外何物をも認めざる螟蛉（アオムシ）の遲々たる匍匐に超越する。あの高等の認識は、丁度之れと同じく、吾人が認識に

超越するのである。死に於ては、自體と共に、その感覺、悟性、この有限的生活の爲めに出來たる精神の全構造は、皆敗滅に趣くのである。此等は靈の生活には餘り窮屈になつた形式である、又た事物の新秩序（新生活）には無用なる肢である。此新世界に於ては、吾人が現世にて如上の諸機關を以て、個々に不完全に、骨折れて到達するものを、靈は突然として直接に之を有し、之を觀し、之を享樂するのである。然れども人の個性は、現世の諸形式（諸機關）は破壞せらるゝとも、その擴張發展に於ては、毫も毀損せられないで、依然として存在するのである。而して此等の消失した劣等の活動の代りに、高等の生活が來るのである。思想の擾亂も、みな鎮靜に歸し、思想今や自己を得んが爲めに、自己を探がすの必要もなく、又た相互の關係を知らんが爲めに、相互に運動接觸するの必要もない。此の代りに、靈と靈との高等の交通生活が始まるのである。思想が相互に交通するは、吾人が精神内に於てする如く、靈と靈との交通は、一層高尚なる他の靈内に於てするのである。此靈の一切を結合する中心點を、吾人は神と名づけ、吾人が思想の活動も、實に此交通の一分枝に過ぎぬのである。今は互に了解するに言語も要らない、他を認むるに眼も要らない。丁度吾人が思想が、吾人が他の思想を了解し、之に感化を及ぼすに、耳、口、手の媒介を要せぬが如く、又た思想が外よりの連鎖や隔壁がなくして、他と結合し他と離るゝが如く、靈の相互の交通も、正に此の如く、秘密で、親密で、且

つ直接である。靈相互間には、毫も隱れたものがない、現世にては、精神の暗黑内に潛める凡ての邪念、世に現はれざらんが爲めに有らゆる方法を用ゐて隱蔽せんとする事此等は、靈には、皆悉く白日の如く明かである。只だ此世に於て、純潔眞實であつた靈だけが、次世に於て、相見えて耻づる處がない。此世にて誤解された人も、彼世にては正當に認識せらるゝであらう。

靈は又た自己を透徹し見るに由つて、その自己の凡ての缺點を識り、この世にて完成せないで、擾亂不調和にして置いたものをも覺るのみならず、此缺點を感ずること、吾人が身躰の不具を感ずるより甚だしいのである。吾人に於ては、思想は、その思想内の不健全なるものを淨め去るに思想を以てする。又た思想は、その共通の要素にて、互に結合して高等の思想となり、以て各自にその缺ぐる所を補るのである。此と同じく、靈もその相互間の交通に於て、その完全の域に達する進歩の手段を得るのである。

第八章

人は此世にて、單に精神的のみならず、また物質的にも、自然と交通して居る。溫氣、空氣、水、土は、諸方より人の中に侵入し、諸方から人の中より流出し、その身體を作り、身體を變じつゝある。此等は、人間以外にては互に行過ぎて居るが、人間内に於ては、相會し相結合して、以て一の仕懸を成すのである。此仕懸は、人の肉體的感覺を、從つて一層内部的なる凡ての精神的要素を、外界の感覺より隔つるのである。故に人は、只だ官感なる窓を通じて、その肉體的家より外界を覗き、且つ之を感ずるのである、言はゞ、釣瓶にて少しく酌むやうなものである。

然れども、人が死すれば、その身體の頽敗と共にこの仕懸も解げ、今や之にて束縛せられぬ靈は、充分の自由を以て、自然界に透徹するであらう。靈は今は、耳や目を打つ光線や音響の波を感ぜずして、エーテルの海空氣の海に逍遙するであらう。今や風が吹いて身に當るを感ぜない、只だ空氣の中や、海の中に、飄乎と浮遊するばかりである。また森や野に歩行はせないで、自覺しながら之に透徹し、且つ、その中に逍遙する人を透徹するのである。

故に人は、高等の階段に移りても、何物をも失はない。只だ失ふものは、此世の機關だけであるが、此機關は、その用不完全であつて、新生活には不用である。現世なる生活の低い階段に於

ては、遲鈍なる媒介にて、只だ外部的に個々に知ることを得たるものを、新生活にては、完全に直接に感じ、且つ之を自己中に收むるからして、かやうな不完全なる機關は、必要でないのである。吾人は生ける自然の泉より、光や音を掬まんが爲め、何故に次世まで、耳や目を持行くであらうか。吾人が未來生活の波動は、光波や音波と調和一であるのである。たゞ之のみではない。

人間の眼は地上に於ける、太陽に類似の一小點であり、天の光の一點に過ぎぬのである。天に關して、今より以上を知らんとする欲求は、此世では、實現せられない。

人は望遠鏡を發明し、之を以て事物の表面を大きくなし、眼の力を大きくなすけれども駄目である。星は依然として小點である。

是に於てか、人は現世が與へぬものは、次世にて達することが出來やうと思つて居る。天に至つて、その知識の欲求を充たし、この地上にての眼に隱匿して居るものが、みな明らかになると思つて居る。

なるほど、尤である。然し是は、彼が翼を得て天に昇り、星より星に移り、あの見える天を登りて、他の見えぬ高尚なる天に達して、之を爲すことを得るのではない。元來事物の性質上、此の如き翼がある筈がない。一の星より、他の星に、次第々々に生れ換りて、以て天を皆な見るのでもない。星より星に小供を連れ

て行く鶴はない。又た人の眼が、最大の望遠鏡となつて、天の最大距離をも見通す視力を得るのでもない。地上の視力の原理は不足なのである。彼は、彼を載せて居る立派なる天躰の意識である一部であつて、この天躰が、他の天躰と、光線的交通を爲すに當つて、自分も意識的に之に與るのである。之に依りて、彼は上述の光明の域に達するのである。是れ實に新視力である。是れ現世に居る吾人には、不適當な視力である。是れ丁度、吾人が現今の視力が天に適せぬ如くである。地球その物が、大なる目であつて、天の中に翱遊し、全然星の光の海に浴し、千萬無量に相交錯するも毫も衝突することなき波を諸方より受けんが爲めに、この光の海に輾轉反側して居る。吾人は後には、この眼

にて天を見ることを學ぶであらう。是れ未來生活を貫ける波動が、該生活を圍繞するエーテルの外部よりの波動を迎へ、且つ之に反對して、最も微妙なる振動にて、天の隅々まで貫くからである。

見ることを學ぶ！吾人は死後、猶ほ非常に多くの事を學ばなければならぬ。吾人は次世に入るや早々、來世が供する完全なる天の明瞭を、自由に使ひまわすことが出來ると思てはならぬ。この世にても、嬰兒は、最初は、視ること聽くことを學ばねばならぬ。嬰兒が最初に見聽する所は、分の分らぬ、困難した、眩惑する光景や、音響である。次世にて、新來者の新機關に於ても、丁度この通りである。只だ人が現世より持つて行つたもの、此

世にて自分があつたもの、考へたもの、爲したもの等の回想は、かの世に入るや否や、忽然之を自己内に明白に見ることが出來やう。然しこれだけにては、彼は依然として在來の人であるのである。又た來世の光明は、懶惰者、愚者、惡人等をして、自己の行爲の不調を感ぜしめ、以て終にはその行を改めしむるに至るの外、彼等には他に何等の利益のなきを思うて居なければならぬ。既に此世に於ても、人は天地の壯麗を見るの眼、音樂、人語を知るの耳、凡て此等の意義を解するの理性を有して居る。然れども、是等は、愚者、懶惰者、惡人には何の用があらう。

現世の最善最高のものは、只だ最善最高の人に取りてのみ、かの世にて最善最高のものである。是れ實に最善最高の人が了解し、意志し、且つ作る所のものであるからである。

之と同じく、來世に於ては高尚なる人にして初て、自分を載せて居る天人と、他の天人との意識的交際を了解することが出來ゝ、且つ其の手足となりて、この交際に交ることが出來る。

此地球は、徐々に、より小さな圖を畫いて太陽を回り、幾億年の後には、元とその飛出した太陽の懷に歸り、而して、凡て地上の生物は、新に太陽の生活を始むるや否やは、誰が知る人があらう。之を知つたとて、今ま吾人に何の用があらうか。

第九章

第三階段の靈は、人類もその一部たるこの地上自然界に住むのであつて、言はゞ一の共同の躰に住むで居るのである。而して自然界の凡ての作用が彼等に於けるは、丁度吾人が躰の作用が吾人が靈に於けるが如くである。彼等の躰は、共同の母として、第二生活階段の諸躰を包含して居る。丁度第二階段の躰が、第一階段の躰を包含して居るが如くである。

只だ第三階段の靈に於ては、その共同の躰の中で、彼が此地上にて養成發展したものゝみが、彼が特有の部分となるのである。此に一人がある。彼が居なかつたら出來なかつたもの、彼

が居たから出來たものがあれば、此物は、存在の共同の根の上に出來た彼自身の新しき存在である。

靈に於ても、固定の組織機關と、活動進行する働との二つがある。丁度吾人が今日の體が、固定したものと、この固定したものに據所を有する變ずるものからと、出來て居るやうである。

さて、來世の靈の生活を載せてる存在の範圍は、互に交錯入込んで居る。此に於てか疑問がある。此の如く無數の範圍が、相交錯して紊れず、損はず、迷はざる以所は如何。是れ出來得べきであらうか。

曰く、先づ是から問ふが宜からう。無數の波動が同一の池の中に交錯し、無數の音波が同一の空中に相交錯し、無數の光波

が同一のエーテル中に交錯し、無數の記憶の波が同一の腦中に交錯し、最後に、無數の人間生活の圓が、來世の胚胎する此圓が、既に此世に於て相交錯して毫も紊れず、毀らず、迷はざる以所は如何。是れ出來得べきであらうか。先づ之を考ふるが宜い。否な、却て無數に交錯することに依りて、現世及び來世の高尚なる生活、波動、記憶の運動等が成立するのである。

然らば、互に相交錯する意識の圓を區別するものは何であるか。

彼等は個々の點(Einzelnheiten 全躰の反對、各部分、細かな事)に於て相交錯するのであるが、此個々の點に於ては、如何なる處にも、何物も彼等を區別するものがない。凡て個々の點は、彼等に共通して居る。然れども、共通して居る有樣が、彼等各々に於て異つて居る、是が全躰に於て、彼等が互に相分れ、個躰として區別せらるゝ以所である。相交錯する波圓を、何が區別するかを再び問へ。個々の點に於ては、區別するものがない。然れども、全躰としては、容易に之を區別することが出來る。內部的に相意識せる圓は、一層容易に、內部的に互に區別することが出來やう。

諸君は恐くは屢々、遠隔の地より、文句が縱に書いたり、橫に書いたり、入れ雜つて書いてある手紙を受けたことがあらう。諸君は、何に由つて、此等縱橫の行を區別するか。則ち各が有する文字意味の關係に由り、之を區別するのである。宇宙なる紙

に書いてある精神的文句も丁度同様に、縦横に入れ雑りて居る。各文句は、只だ自分丈けが獨りある如くに、自分自身に讀め、同時に之を横ぎる他のものも、おのづから讀めるのである。勿論宇宙には、只だ二様の書き方があるでなくして、無數の文句が相交錯して居るのである。此手紙の譬喩は、世界の實相を充分現はすことが出來ない。

然れども、意識はその地を斯く廣く擴げて、如何に自己の統一を保つことが出來やうか。識閾の方則はこゝに之を無視すべきであるか。

身體と精神との關係の經驗的方則に次の如きがある。意識の據れる身體的活動が閾と稱する强度の一定度以下に沉むとき、意識は消失するのである。該活動が廣がれば廣がるほど、該活動は弱くなり、閾以下に沉むのである。全意識は其の閾を以て居る、即ち眠と覺との境界が是である。同様に意識の特別のものも、また其の閾を持つて居る。即ち、覺醒中、或は甲觀念、或は乙觀念、意識内に上り、或は消失す。この甲や乙の據れる特別の活動が、特別の閾に上り、或は下るに從つて、該觀念は消失するのである。

然らば先づ下の問を起すが宜い。意識は身躰内に擴がりて、如何にその統一を保持することが出來るか。靈の擴がりは、此身體内の擴がりの續きであつて、只だ大小形を異にしたゞけである。身躰や腦は、一小點であるか、或はその中に靈の座として、特別に中心點があるであらうか。否な、かやうなことはないのである。身躰の諸關係の一小結合を作るのが、現世の靈の性質であるが、丁度之と一様に、より大なる躰の、より大なる結合を作るのが、未來の靈の本質である。神の靈は、しかも宇宙の全

結合を作るのである。諸君は、また神を一點に求めやうとするであらうか。神は至る處に存在するのである。諸君は、他日大に此遍在に與るであらう。

諸君は、未來生活の波は、これが廣がつても、此世にて達した闕には達せぬと心配するかも知れぬ。然るときは、之を思へば宜い。未來生活の波は、決して空虛な世界に廣がらない。若しさうであつたら、深淵に沈んで仕方がなくなるであらう。故に之が廣がるのは、神の永久の基礎であると同時に、諸君が靈の基礎である所の世界に廣がるのである。萬物は、只だ神の生活の基礎のみに生活することが出來るからである。

藪雀が、鷲の背にうち乘れば、自分獨りでは、容易に飛ぶことの出來ない高い山の頂上を越すことが出來る。而して最後に、鷲の背より飛んで、鷲の高さより少しく高く飛ぶことが出來る。然し、大きな鷲も、小さき雀も、同樣に共に神のものである。

吾人は死後、如何にして腦髓なくして濟むであらうか。腦髓は實に巧妙なる構造である。自己の靈の凡ての活動を載せ、又た靈の活動に依り一層發展し、一層有力で充實せる活動を載するのである。此の如き腦は、何等の用もないのであらうか。

先づ植物を見るが宜い。植物がその種子を破り、生長光線に浴するの後、如何に種子がなくして濟むかを考ふるが宜い。種子は實に巧妙なる構造である。その內部の胚種の發生に依りて、自ら進んで發展するのである。此の如き種子が何の用もな

さんであらうか。

然れども、吾人以外に、何處に、來世に於て腦の代をする、腦の如き巧妙なる構造があらか、何處に腦に優るものがあるであらうか。來世は實に現世に優るべきである。

然れども、諸君の全身體は、目や耳や、乃至、腦や、若しくは他の部分よりは、一層立派なる、一層高尚なる構造ではないか。然らば、人間が、國家や、科學や、藝術商業等と、その一部をなす世界は、この一部のまた一部たる、諸君が小さな腦に勝ること萬々である。諸君は、高尚なる見識を得んとならば、地球を以て、單に土水空氣より出來たる球とばかり見てはならない。地球は、諸君より立派なる高尚なる統一的の活物である。諸君が以て地球

に惡來を貢獻する小さき腦よりは、一層不可思議なる生活云爲をその表面に有する天の活物である。諸君は、諸君が身の周圍の生活を認識することが出來なければ、來世の生活を夢想することだも出來ない。

解剖學者が人の腦髓を見る時、何を見るであらうか。彼は只だ、白き纖維の混沌を見るばかりであつて、之が意味を解くことは出來ない。腦自身は、自己内に何を見るであらうか。光線、音響、思想、記憶、想像、憎愛の情等の一世界を見るのである。之と同じく、諸君が世界の外に在りて之に見るものと、世界自身が自己に於て見るものとの關係如何を考へて見るが宜い。然らば諸君は、世界は全體に於て、その外形と内部と相似ないことは、

世界の一部たる諸君に於けるより、一層甚だしくあるを承知するであらう。只だ諸君は、世界の一部であるからして、從て諸君は、世界が自己に於て見る所の一部を、諸君自身内に見ることが出來るのである。

最後に疑問が起らう。言はゞ吾人の發達した體ともいふべきものを、來世に於て覺醒せしむるものは何であるか。吾人が現世にて此地球に突出す未來體は、吾人が窮屈なる現世の體に續きであるのである。之を目醒めしむるものは何であらうか。

即ち此窮屈なる體が眠ること、否な朽ちるといふことが、之を覺醒するのである。是れ現世を一貫する普遍的法則の一例

に過ぎないのである。從つて該法則は、現世を超越して、來世にも通ずるのである。汝等懷疑者は、只だ現世のみよりして推論せんと欲して居る。故にかく推論せねばならぬ。

意識の活力は、決して眞に新に出來るものでもなければ、又た決して亡びるものでもない。丁度該活動の由れる身體の活動と同樣に、只だその位置、形式、時間、空間に於ける其の廣がる方法等を變ずるのみである。只だ、今日沉めば明日現はれ、今日現はるれば明日沉み、此に沒せば他處に出て、此處に出づれば彼處に沒するばかりである。

物理界に於ける勢力保存の法則に類似せる此法則は、精神と肉體との關係に依り、物理的法則と關係あるや疑を容れない。但だし此關係は、明白には證明されない。又た精神物理的活動の性質明白にならざる以上は、精神

活力の保存の規則を、物理的勢力の保存より導くことも出來ない。故に該法則は、上述の如く、事實より推せなければならぬ。精確に普遍的効力あるや否やは證明し能はざるも、充分の或然性を有し、以て此に論の基礎と爲すことが出來る。

諸君は、目が醒めん爲め、自覺を以て見ん爲めには、耳を眠らせなければならぬ。內部の考が醒めん爲めには、外部の官感を眠らせなければならぬ。一小點に於ける傷が諸君が全精神の意識を全く盡すことがある。注意の光が廣ければ、それだけ之が各部を照すことが弱い。この光が、明瞭に一點を照すこと強ければ、從て他は暗黑になるのである。或物を照すとは、他のものより引取ることである。諸君が今日の覺醒は、昨日來の眠に依るのである。今日眠る深ければ、それ丈け明日は覺醒して活潑てある。覺醒活潑であればあるほど、深く眠るであらう。

此世に於ては、人は畢竟常に只だ半眠を爲すに過ぎぬのである。是れ舊からの人が其處に居るからして、この半眠は、此舊人を再び目醒めしむるのである。死に至て初て全眠があるのである。是れ舊からの人は、今は居ないからして、新しき人を目醒めしむるのである。然れども、在來の法則は此にも猶ほ依然として有効であつて、舊意識の補充を要求し、舊の躰の續きとして、新しき躰が存在する。故に新しき意識が、舊意識の補充繼續として出現するであらう。

舊躰の繼續！老人の身躰は、小兒の身躰の一微分だも有せぬけれども、小兒の躰が有して居つた意識の繼續を有して居

る。丁度同一の理由よりして、來世の躰は、老人の躰の一微分だも有せぬけれども、老人の躰の有して居た意識を繼續して持つて居る。是れ後より來る躰は、何れも以前の意識を有して居つた躰の活動結果を自己に保存し、之にて出來上つたものであるからである。故に現世の生活を、今日より明日に、現世より來世に續けしむる一原理があるのである。是れ人間の永久保存の永久的原理にあらずして何んであらうか。

諸君が現世にて云爲して世間に及ぼした、諸君の外に出た事業感化は、單に諸君の外に出た如何なる他の事業感化よりも、より多く諸君に屬すべきものである。是れ何の故であらうか、問ふに及ばぬことである。その理は則ち是である。前者が、後者より遙に多く諸君より出たからである。凡ての原因は、之が永久の所得として、之が結果を有して居る。畢竟諸君が行爲結果は、決して諸君以外に出づることはない。是等は、現世に於て、既に諸君自身の無意識的の繼續であつて、只だ新意識に覺醒せんことを俟つて居るのである。

人は一度生活したら、死ぬることが出來ないと同樣に、以前に生活して居なかつたら、生活に覺醒することは出來ない。只だ彼は、以前には單獨に生活せなかつただけである。（吾人が未來世に覺醒するは、現世の生活があるからである。然し、現世の生活は獨立單獨のものではない。下文に明かである。―譯者）嬰兒が生れる時に生ずる意識は、永久に存在する普遍的、神的意識の一部であつて、之が生れた新靈魂に注意を集むるのである。吾人は、勿

論、物理的勢力と同樣に意識の此活力を究め尋繹することは出來ない。

人間の意識は普遍的意識から生れたからして、再び此中に戻りはせぬかと恐るゝならば、請ふ木を見るべしである。枝が幹より生ずるには、幾星霜を經過した。然れども、一度出たら、枝は幹に戻り沒することはない。若しかやうなことがあつたら、木はいかでか生長し發展することが出來やう。宇宙の生きたる木も、同じく生長し發展するのである。

現世よりして來世を定むる推論の妙は、畢竟、吾人が知らざる基礎、或は吾人が自分で作つた假定から、之を爲すのでなくして、吾人が知れる事實から、より立派なる高尙なる來世の事實を推し、之に依りて、實際生活に必要なる、高尙なる見地に繫がる信仰を、下より支へ、固め、而して、之を人生と生ける關係に置くにあるのである。吾人信仰を要せずば、何の爲めに之を支へやう。然れども、支柱がなくばどうして之が有用であらうぞ。

第十章

人の靈魂は、その全身に行渡りて居る。靈魂が去れば、身體は朽ちる。然し、意識の光は、時に從ひ處を變ずる。

之を科學的に言へばかうである。意識は、精神活動の下に在る精神物理的と稱する身體の活動が閾と稱する强さの程度を越ゆる時には、又た越ゆる處には、意識は其處に存在し、覺醒して居る。此見解に從へば、意識は時間と空間とに置かれることが出來る。吾人が精神物理的活動の波の絶頂は、昔はゞ、場所より場所に移り、意識の光はその位置を變ずるのである。只だ現世の生活の間は、吾人が體内に、否な、體内の限られたる部分に、あちこちに動搖し、睡眠中全く閾下に沉み、覺醒して再び閾以上に上るのである。

吾人は、丁度意識の燈が、狹き體内にあちこちに周行して、目、耳、内部感覺、外部感覺と、代る〳〵之に照してやるのを知つて

居る。最後に、死に至りて、全く體内を出て、漂泊する。恰も自分が多年、内にあちこちして居た小さき家が破れて、未來永く世間に出て、新に漂泊を始める人の如くである。死は、漂泊を狹き場所より廣き場所に變ぜしむる外、別に兩生活の間を隔つるものでない。現世に於ては、意識の燈は、前後相繼ぐことは出來、又た何處へも廣がることは出來るけれども、同時に凡ての處にあることは出來ぬ。未來生活も同樣である。只だその漂泊の場所は、極めて大きく、その擴がりは廣く、道は自由で、見地は高くして、現世のより低き一切を網羅して居る。

既に現世に於ても、例外であつて極めて稀ではあるが、意識の光が、狹き體より廣き體に漂泊し、或は空間的に遠方にある

もの、或は時間的に現在の事情より關聯して起れる未來の事の報知を齎らして歸るとがある。實に未來の長さは、現在の廣さに基づくものであるからである。現世と來世との間の、平常は閉ぢられてある門に、突然少しく隙が開き、忽ちにして復た之が閉ぢることがある。此門は死の時に全く開くのである。其時初て全く開いて、再び閉ぢないのである。死以前に此隙より覗くは無用である。然れども、現世の法則の此例外は、現世來世兩方を同時に包含する、より大なる法則の一例に過ぎぬのである。

時としては、此窮屈なる體が、一方面に於て、その平生の程度を越えて、非常なる方法に覺醒せんが爲め、他方面に深く眠る

ことがある。尤も再び覺めぬ位、全然且つ深く眠るのではない。或は大なる體が、或る一點に於て、非常に強く刺戟せられ、以て平常は近づく可らざる遠方より、闊以上の感化を、吾人の狹き體に及ぼすことがある。是に於てか、千里眼、豫感、前兆の夢等がある。若し未來の體と來世の生活とが、只だ小說に過ぎぬならば、是も小說であらう。さもなくば、是は未來體の標徵、來世の前兆である。標徵あるものは存在する。前兆あるものは來るであらう。

然れども、是等は現世の健全なる生活の徵候でない。現世は只だ、來世の爲めに、來世の體を作るべきであつて、來世の眼を以て見、來世の耳を以て聽くべきではない。時節の至らぬに開

く花は榮えない。來世の信仰は、上述の如き、來世が現世へ閃めき入つた痕跡の信仰にて、之を支ゆることは出來るけれども、此上に來世の信仰を築ぎ上げてはならない。健全な信仰は、推論の上に出來上り、健全な生活の最高の見地に至りて終り、信仰其物が、生活の健全、その高尚なる見地の歸着に必要であるのである。

諸君は是まで、死者が諸君の記憶内にて、諸君に現はれた髣髴たる形態は、單に諸君が内部の空影に過ぎないと思つて居つたらう。諸君は間違て居る。是れ生ける彼自身であつて、意識的に單に諸君に見ゆるのみならず、諸君の内に入來つたのである。彼が生前の形態は、今ま猶ほ彼が靈魂の衣裳である。今は

只だ、以前の固定の體を以て煩はさるゝことがなく、以前の體を引ずり遲々として行くことがなくして、地上の荷を脱し、透明であり、輕快であり、忽ちにして此處に居り、忽ちにして彼處に行き、以て己れ死者を呼ぶ聲に從ひ、或は自分から諸君の處に行き、以て諸君をして、該故人を回想せしめて居る。古來死者の靈を以て、輕快で、形態がなく、空間の制限から離れたものと思惟して居た。是れ正當な見解のつもりではなかつたけれども、實は正鵠を得たものであつた。

諸君は必ず幽靈の出現を聞いたことがあらう。醫者は之を幻想とか幻覺とか名づけて居る。なるほど、是は生ける吾人には幻想である。然れども同時に所謂死者の、實際の現象である。

吾人が記憶内の弱き形像さへ、死者の實際の現象である以上は、是より一層強き幽靈の像は、一層實際ではなからうか。幽靈は、幻想であり、同時に實際である以上は、是が一であつて、他であらぬと爭ふの必要はない。諸君は、既に諸君自身内の、幽靈と等しき記憶像を恐れない以上は、今後幽靈を恐るゝことはない。

とはいへ、幽靈を恐るゝ、全く理由が無いではない。幽靈は、諸君が自分で呼起した像影とは異り、或は諸君が内部生活の進行中、自然に自ら、徐ろに靜に入來り、以て意識生活の發展に貢献する像影とは異なり、呼ばれずして入來り襲ふが如くに到り、剛然として之を拒ぐことが出來ず、宛然として諸君が面前に現はれ。實際に諸君が内に入來り、諸君が内部生活の發展を助くるよりは、寧ろ之を妨ぐるのである。是の如き現象は、現世に於ても、來世に於ても、兩ながら病的の存在である。死者と生者は、此の如き方法にて交通すべきものでない。死者が互に相見るが如く、生者が死者を明瞭に客觀的に見るは、生者も半ば死んだものといふべきである。是れ死者の出現に對して、生者の慄然として懼るゝ以所である。斯樣な現象は、死人が死の向の界より、死の此方の國へ、半ば逆行したるものである。故に、かやうな傳說がある――單に傳說に過ぎぬであらうか――即ち、未だ全く解脫せない、現世の重き鎖を纏へる幽靈のみが彷徨すとの傳說がある。不祥を掃ふには、善なる強き靈の援助を

乞へ、但し最善最強の靈は、一切の靈の上に位する靈である。此靈の保護の下にあれば、何者が諸君に加ふることが出來やうか。神の名を呼べば、諸の惡魔逃去るとの傳說は、正に之と一致して居る。

然るに、幽靈なる精神的病氣の事に於ては、信仰は迷信に傾き易い。幽靈の出現を妨ぐる最簡短の方法は、其の出現を信ぜぬことである。其の出現を信ずるは、是れ途中に之を迎ふると同樣であるからである。

予は上に死者が互に相見る如しと言つた。現世の秩序に反する幽靈の現象は只だ來世の秩序より豫期すべきものである。來世の住民は、赫として明瞭に客觀的に相見え、其の形態は、吾人が記憶に於て、只だ之が微影、朦朧たる輪廓を有するのみである。彼等は、其の全存在を以て互に透徹し、吾人は、彼等を記憶するとき、只だ吾人の一部分を以て、彼等の存在に入るのである。彼等を得るには、來世に於ても、現世に於ても、同樣に、之に充分の注意を集むるの必要がある。

或は問を起すものがあらう。斯樣に相互に交錯貫通するものが、相互に客觀的となり、相分れて個々別々となりて居るは、如何にして出來得べきや。然れども先づ次の事を考ふるが宜い。一生存者の現象として吾人の內に入り、或は一故人を回想して吾人が腦に透入するものが、(かく見るより他に方法はない)直觀として客觀的に、又た記憶として分れて見ゆるは、何故

てあらう。記憶を生ずべき活動は、それ自身分明に分れて居らぬけれども、記憶が最初出た形を、分明に吾人が前に現はれしむる。吾人は、現世にてその何故なるかを知らない。何んぞ來世に關して、之を知ることが出來やうか。

故に予は言ふ、諸君が知らぬ現世の理由よりして推斷してはならない。又た諸君自身が作つた假定より推斷してはならぬ。諸君が知れる現世の事實より、來世の、より立派なる、より高尚なる事實を推せんければならぬ。個々の推論は、誤謬に陷ることもあらう。故に個々には重を置いてはならぬ。諸種の推論が、會合一致して、凡ての推論に先んじ、凡ての推論に越ゆるものゝ方向に向へば、是こそ、吾人が信仰の下からの支柱となり、同時に上への案内ともなるのである。

然し、若し諸君にして、信仰を直に上方より得んとすれば、吾人が以て上に登るべき信仰の道は、直に破れるであらう、

第十一章

「人は神に住み、神に動き、神に存在する」との、千年以上も人が弄して居た言葉の中には、言葉以上のものがある。之を覺ることが出來れば、如何に萬事信仰に好都合であらうよ。然るときは、神の信仰と、自己の永久の生活の信仰とは、同一である。吾人は、吾人が自己の永久の生活は、神自身の永久なる生活の一部であるを知り、又た、未來生活が、現世の生活に秀づることは、神の内に於て、吾人が今既に有して居る低き建物の上に、より高き建物が立つことであるを知るのである。吾人は現在の卑近なる例にて、來世の高尚なるものを知り、卑近高尚、兩者を綜合

して、吾人は只だその一部たるところの全躰を了知すべきである。

直觀（コンシヤウシング）が意識を去れば、記憶之れより現はれる。神の内に於ける現世の有らゆる直觀生活が去れば、高尚なる記憶生活が、神の内にて之よりして起るべきである。記憶が吾人の頭内に於て作用する如く、來世の靈は、神の頭内にて相交際して居る。是れ同じ梯子に於て、一階級登つたゞけである。此梯子は、神へ登るべきものでなく、神の中に在つて、上へ登つて居るものである。神は梯子の底も、絶頂をも、自己内に有して居る。上述の言を空虛と思ふ人には、神は如何に空虛であらうぞ。然し上述の語が、意義深長なる人には、神は如何に充實であらうよ。

諸君は、現世に於て、如何に來世を直觀することが出來るかを知ると思つて居るか。諸君は、只だ來世は實際に在ることは知りて居るけれども、如何に之を直觀することが出來るかは、靈でなければ知ることは出來ぬ。諸君は、如何に之が出來るかは知ることが出來ぬけれども、未來生活の實際は、容易に信ずることが出來る。此未來生活には、諸君の靈全躰が、一の高等なる靈の内に在るのである。さて未來生活の實際を信ずるには、高等の靈が存在するといふこと、及び諸君はこの高等の靈内に在ることを、信ずるのが必要である。

次に「神は萬物に生活し、萬物に活動し、萬物に存在す」との言葉に、眞理を見ることが出來さへすれば、如何に萬事信仰に容易であらうよ。然らば、吾人が、未來の躰を作り、以て神の家の内に、新しき家を建てるのは、死んだ世界からでなくして、神に依つて生きて居る世界からである。然れども、生活を與ふる此信仰は、何時生活ある信仰となるであらうか。

此信仰が、生活を與ふるものであるといふ事實が、正に之をして生活あらしむるであらう。

第十二章

諸君は在るや否やを質問する。予は其の如何に在るべきかを以て答として居る。信仰があれば、在るや否やの問は無要である。然し一旦問が起れば、之に對する唯一の答は、如何に在るべきかが確乎動かざるに至るまでは、在るか否やの問は、反覆繰返されて、己むことはなからう。

此處に木がある。其の一つ〳〵の葉は落つることがある。然し其の根ざして居るところは堅固である。新しき枝は常に出て、葉は常に新に落つるであらう。然し、木自身は倒れない、のみか、美しき花を生じ、信仰に根ざすことの代りに、信仰の實を結ぶであらう。

附錄

フェヒネルの生活及び哲學

フェヒネルの生活

前半の生活、科學時期

一　幼年、學生時代

フェヒネルは質朴靜肅なる純粹の學者の生涯を送り來たつたものであつて、其外部的生活は多く記すべきものはない。然れども彼は一生を通じて黽勉熱心なる眞理の探求者であり、其中年に至るまでの生活は、崎嶇參差、實に奮鬪的であつて

吾人をして感憤激勵せしむるものであり、其後半の生活は、溫和質素なる、宗教心に充滿せる哲人の生活であつて、寔に學者の好典型であり、正に傳うるに足るべきものである

グスタフ・テーオドル・フェヒネル (Gustav Theodor Fechner) は、千八百〇一年四月十九日、普領（當時撤廢に屬した）シュレージエン州ニーデルラウジツのムスカウ (Muskau) 市の近傍、グロースゼールヘン (Grosssärchen) といへる村に生れた。元來、牧師の家より偉人の出てた例は頗る多い、フェヒネルもその一例である。彼が家は、十八世紀の中頃、既に其祖父の時より牧師をして居た。祖父は此地にて懇到親切なる家父として知られ、又た地主でもあり、醫も兼ねて居た。フェヒネルの父また祖父の業を襲いて牧師であつた。時恰も十八世紀の所謂啓蒙時代であつて、其時代精神の波は汨として津々浦々までも打寄せ、その風は颯として野の末山の奥にも吹及んだ。フェヒネルの父は其近隣の地中、率先して新思潮に浴し、新空氣に觸れた人であつた。彼は此地にて其寺塔に避雷針を備へさせた最初の人であつた。彼はまた眞先に其兒童に種痘さした。また假髪を被りて說教壇に現はるゝ在來の習慣をも棄てゝしまつた。此假髪の着用を止めたことは、大に村人の感情を害したが、彼は救世主基督も假髪を被らずして說教したことを明にし、以て漸く村の役人共を納得さしたとのことである。

フェヒネルは此の如く卓越なる父を有して居たが、遺憾に

も永く其膝下に生長することは出來なかつた。彼が父は彼が六歳の時に世を辭した。彼が母は、また牧師の家より出でたものであつたが、是に於て北方數里の小市ツリーベル(Triebel)に移住した。幾くもなくしてフェヒネルは、後ち畫家となつた彼が兄エヅアルトと共に、ライプチッヒの東方數里に在るヴルツェン(Wurzen)といふ處に牧師をして居た彼が叔父の家に世話になることゝなつた。叔父後ち南方チューリンゲンのラーニス(Ranis)の牧師に移さるゝに及び、二兒共に之に從うて行つた。

フェヒネル十五歳にしてゾーラウ(Sorau)前出ツリーベルの東數里のギムナジウムに入學した。幾くもなくして、母居をヅレスデンに移したからして、フェヒネルも母の許に歸り、此地のギムナジウムに入り、やがて其課程を終へた。フェヒネル是に於てヅレスデンの醫學校に入り修業したけれども、半歳にして之を退學した。

千八百十七年フェヒネルは歳十七、ライプチッヒ大學に入學し、醫學を修むることゝなつた。萊市は、彼が今は大學生として此に入つてから、以來七十年、彼が死に至るまで、引續き彼が住所であつた。彼は旅行の爲め只だ折々此を去つたばかりであつた。萊市は實に彼が愛した永住の地となつたのであつた。彼は十七歳の青年、一寒書生として此市に來り、此市にて知識修養を加へて發達し、此市にて有名なる學者となり、此市の名

譽市民に擧げられて此市民に愛慕崇敬せられ、終に此市にて永眠したのであつた。彼は彼が自己の發達と同じく此市の發展を目擊した。彼が最初來た時には、萊市は人口僅に四萬の小規模の都市であつたが、次第に膨脹發達して繁榮隆盛となり、獨逸南北通商の結合點となり、音樂書籍業に於ては、覇權を天下に握れる大市となつた。萊市はフェヒネル遊學の當時、斯の如き未來發達の萠芽を有して居たのであつた、從てライプチッヒ大學も新鮮活潑の英氣が充滿して居た。フェヒネルの俊秀を以て、此敢爲進取の精神に富める地、進鋭豪邁の氣象に滿てる大學に遊ぶ、其發達は期すべきである。

フェヒネル大學に入學はしたが、學資に乏しかつた、母は充分に之を供給することが出來なかつた。彼は最初は奬學金の補助を仰ぎ、私宅教授等の如きをして學資の不足を補つて居たが、後には之に代ゆるに著述を以てし、重に佛語より理化學に關する飜譯、譯述、或は參考書の編纂を爲し、以て學資を調へて居た。

此等著述的事業はフェヒネルが學問の方向を一變するに大に與つて力があつた。即ち此等著述が理化學に關したものであつたからして、彼は自然に醫學より遠ざかつて、理化學に力を竭すやうに至つたのである。且つ當時醫學は、其進歩の狀態猶ほ幼稚であつて、嚴密なる研究の方法も備はつてなく、經驗的事實を說明する學說も乏しく、只だ確實なる困據のなき

傳來の說に由るばかりであり、術としてまた極めて不確實であつて、恰も闇黑の中を手探りするやうであり、學問としては到底科學的の實驗を施しやうがないやうに思はれて居た。斯の如き有樣であつたから、醫學はフェヒネルの如き科學的嚴密に傾ける頭腦に滿足を與ふることは出來なかつた。且つフェヒネルは其傾向上、學理を好んで、實際を喜ばなかつた。從て醫師となつて診療に從事するのは、己の天職でないと感じて居た。故に大學に於ては、純粹の醫學の講義よりは、寧ろ生理學の講義（當時生理學は有名なるヱーベル教授之を擔當して居た）代數學の講義に喜んで出席して居た。彼は實に病理學や治療術の講義には出席せなかつた、彼は書籍にて之を學ぶを以て滿足した位であつた。

然しながら、フェヒネルは無事醫科の修業を卒へ、最低の學位（バチエラー）試驗にも及第し、千八百二十二年にはドクトル試驗にも及第したけれども彼は實地の醫者とならなかつた。彼が醫術に就き學修せし所は、却て彼をして此術を嫌はしめ、且つ自己に對して自ら不信用を抱かしむるに與つて効があつた。彼は自分の實地に於ける不堪能なるを述べ言て居る。ドクトル試驗も及第したからして、正規の手續さへすれば、內科も外科も助產科も行ふことが出來るやうになつたけれども未だ刺絡したこともない、一つ繃帶を施したこともない極く樂な出產の手助をしたこともない。また此等を稽古する機會があるとも思へないのみか、之を補修するに、元來實地的の能力に

缺如して居ると自ら感じて居た。予は如上の準備なき爲め、實地に當りて困却(こまか)るは明瞭である。然し若し予にして、予に衣食の料を得せしめ、且つ他の方向に予を入らしめた著述の業に徐々從事せなかつたなら、必ず必要に迫られて實地の練習を行うたに相違ない」。フェヒネルの言はゆる他の方向とは、彼が實驗的自然科學に心身を傾注したことである。而して此實驗科學の研究より得たる彼が學問の基礎こそは、彼をして他日學界に非常の貢献を爲さしめた所のものであるのである。

フェヒネルが實驗科學に入る前に、一時、言はゆる思辨的自(スペクラチーフ)然哲學に捕はれたことがあつた。思辨的自然哲學、或は自然的物理學とは、觀察や經驗を顧みずして、單に思考よりして、自然宇宙を說明せんとする、當時勢力のあつた哲學說である是れカントが、自然の法則なるものは、吾人が自然を考うる思考の形式であるといふ思想よりして、一方に偏して發達して來た歷史的學說である。フェヒネルの幼時、オーケン (Oken) なる學者、自然哲學敎課書といふを著はしたが、フェヒネルは千八百二十年頃之を手にしたといふ。オーケンは實際に自然科學者であつて比較動物學、解剖學、生理學に關して功勞ある研究を爲した學者である。然し、思辨的哲學、殊にシェーリング哲學の影響を受けて、純粹に思考より自然の構造を說明した。想像思想に豐富なる青年フェヒネルは、嶄新奇拔な考に充てるオーケンの著述に無量の興味を感じ、一時非常に之に熱心になつ

た。然し科學的嚴密の傾向ある彼が頭腦は、久しく之に魅せられずして、やがて、思辨的哲學が、人の意志、感情、想像に左右せらるゝ架空の說に過ぎざることを看破し、再び實驗的科學に從事するに至つた。

二　科學研究、奮鬪的生活

フェヒネルは千八百廿三年九月ライプチッヒ大學無給講師に擧げられ、翌廿四年ギルベルト敎授の死後、物理學の講義を爲し、今や徐々自己の實驗的研究を行ふことが出來るやうになつた。彼はやがて用意周到なる綿密な科學者としての名譽を博するやうになつた。專門家が此認識を彼に與ふるやうになつたことは、彼が他日哲學的考察を爲し、之を科學と結合せしめ、しかも大膽なる假設を立てし時に、科學者の信用認識を受け、其說の單に空想想像の產物にあらざることを思はしめしことに於て、大に好都合であつた。

當時科學の研究年々旺盛となり、物理學中殊に電氣に關する學說發見が續々唱道發表されて居た。千八百二十年は實に物理學の新時期の始まつた年であつた。同年丁抹人エールステット（Oersted）は電磁氣に關する發見を爲し、佛のアムペール（Ampère）は此發見を進めて他の發見を爲した。千八百廿五年英のスターージアン（Sturgeon）電磁氣を發見し、同年有名なる英のファラデー（Faraday）の研究が始まつて、やがて感應電流を發見した。翌廿六年には獨人オーム（Ohm）かの有名なる

オーム律を發見した。フェヒネルこれらの研究者の群に加はり、凡そ廿年間此方面の研究に從事した。電氣學に關する彼が功勞は、複雜なる場合に於けるオームの測定を完全有効ならしめ、以てオーム律の認識を容易ならしめたものであるといふ。彼が研究に於ける方便材料の不備缺乏を考ふれば、彼が事業は實に驚嘆すべきものであつたとのことである。彼は彼が著述より得た乏しき費用を節儉して、自分で機械を製し、以て實驗に供したのであつた。而してまた當時精密なる實驗的測定の術は一般物理學者の知らざる所であつて、フェネル自身色々之を工夫せなければならかつた。彼は幾多の困難障碍に遭遇したけれども、その整頓方式の巧妙周密、加ふるに非常なる勤勉を以て、驚くべき精密の結果を得るに至つた。而して其方便の單純、實に科學實驗の模範であると稱せられて居る。其他電氣分解に關する重大なる實驗や、ボーチンベルゲル (Bohnenberger) の驗電器の改善、電磁石の牽引力に關する實驗等其功績尠からずといふ。

此等の研究と同時に、フェヒネルは色彩の主觀的現象に就き討究を企てた。是れ實に彼が純物理的純客觀的研究より生理的心理的研究の過程に當り、彼が後に創始した前人未發の精神物理學の前驅とも見るべきである。主觀的色彩現象とは今日心理學にて言ふ補色、殘像、對比等の如き現象であつて、誰人も能く經驗する最も著しき例は、太陽を見た後ち暫時は、何

を見ても色ついて見えないことなき主觀的現象である。フェヒネルは此等主觀的現象の研究を始め、其遂げた所は此等の現象の一部分であつたけれども、組織的觀察に對する新領域を發見し、之より結果を擧げたことや、一現象をも極めて熱心に研究し、如何なる勞力をも避けず、終には健康をも損するに至つた位であつたこと等は、能くフェヒネルの特性が是に發揮されて居る。

以上列記の研究は、フェヒネルをして諸種の新發見をなさしめ、卓越なる物理學者として名聲を博するに至らしめたのであるが、しかし之は單に彼が時間と勞力とを費した彼が一小部分の事業である。彼は彼が衣食の爲め非常なる仕事をせなければならなかつた。而して其仕事は前に述べた如く著述であつた。彼は實に奮鬪的生活を戰ひつゝあつた。彼が衣食の爲めの事業を一瞥せば、誰人も彼が勤勉、彼が精力の絶大を驚嘆せざるを得ない、彼は千八百廿四年より同卅年に至るまでに、上述の研究及び腦病に關する飜譯の外、六卷より成るテーナルド (Thénard) 佛國西の有名なる化學者 の化學書の譯述、四卷より成るビイオ (Biot) 佛の物理學者 の物理學、全く改刪を加へた同書五卷、凡て重要な新研究新發見の報告をも含める化學の參考書二卷、また千八百卅二年までに實驗物理學の同樣なる參考書三卷、物理化學に關する小論文の外に、上述の電氣學に關する二種の比較的長き論文、千八百三十年以來、藥劑に關する雜誌の編輯、

教科用の爲めに編纂した生理學の書、及び論理學の書、またドクトル・ミーゼスの假名の下に著せる幾多の諷刺的論文等、皆彼が數年間の事業である。

以上の著述は低く見積つても、一年に三卷乃至四卷出した譯である。此等は單に飜譯としても非常な事業である。然るにフェヒネルの如き人は、單に飜譯者を以て滿足せない。原書に不足不滿の處があれば、彼は自ら自己の作を之に加へ、或は之に改善を加へ、完備を計り、終には原著と全く異なりたるものとなした。故にテーナルドの化學の第三卷の序文に、有機化學に於ては、佛書は只だ之を利用したのみであつて、重なる處は自己の作であると譯つてある。故にテーナルドの六卷の中、後の四卷は、全くフェヒネル自身の作である。ビイオの物理學に於ても同樣である。例へば光學に關してビイオは、ニウトンの放射說を守つて居たが、フェヒネルはハイゲンの波動說に加擔して居た。ところが丁度フレスネルの實驗に依つて波動說が勝利を得たからして、フェヒネルは原書を改めた。其他の點に於ても同樣に新研究に從つて之を改善し、しかも電氣學に關する一卷を之に加へて五卷となした。故に此等の譯述は實際に於て、其正味譯述者フェヒネルの精神的財產であるのである。只だ書肆がまだ名もよく顯はれぬ獨逸の無給講師の名を以てするよりは、原著者なる佛蘭西の大家の名を以て出した方が、商賣上有利であつたからして、斯くフェヒネルの著述

とせなかつたのである。此等の譯述と密接の關係ある參考書も、同樣に驚くべき精力の證據物であり、同時に一個人に稀なる多方面を以て、嚴密科學の諸方面の材料を自由に使回はしたことを證明して居る。彼は之に於て、雜誌や報告に現はれたる實驗的研究に關して忠實なる一覽を供給したのみならず、純粹に理論的數學物理的研究の困難なる問題に於ても、假說や結論を明瞭に說明して、能く人をして之を悟了せしむる技倆は、實に驚くべきものである。また當時發表せられた諸種の學者の說も明瞭に紹介せられて、今日と雖も之を讀んで益する所尠からずといふ。是等は固より純粹に自己の創始にあらずして、再生的のものであるけれども、如何にフェヒネルが科學研究の結果を會得し、之を評價することが出來るかを表はし、以て彼自身も創始的能力を有して居たことを現はして居る。ヴントは言つて居る、若し此等の事業が往々非常に困難なる外部的境遇の下に、實際フェヒネル一人にて爲されたものであるといふことを知らない人は、必ず一人の名の下に學者の一群が働いたと思うであらうと。

フェヒネル自ら好んで此等の重荷を擔ふた譯でない。彼は出來得るならば、彼が時間と勞力とを獨立の研究に費やしたのであつた。然れども收入無き講師の身であり、實地の醫師には前に述べた通り爲る事を欲せなかつた、而して彼は千八百卅年ライプチッヒの參議官の女、グラーラ・フォルクマンと婚

を約したが同卅三年には遂に婚を結ぶことゝなつた。彼は愈々筆を繁忙に働かせなければならなかつた。只だ彼は彼が精力を信じて居つたのであつた。また有名なる書籍商の市のことゝて著述の依囑は絶えずあつた。否な彼には餘計なほどあつた。彼は學者が純粋に科學的の著述をのみ爲しても、當時の萊市に於ては筆の力を以て、質朴の生活なら、親子三人を維持するに充分であることを證明した。

フェヒネルは上述の教課書や參考書の著述終るや、未來に對して確實なる收入を得んが爲め、本屋の依囑を受け、家庭辭書の編輯を引受けた。是れ全部八卷より成り、千八百卅四年より同卅八年までに出版された。其中諸種の問題を含んで居る

約三分の一は、フェヒネル自身の手で成つた。然るにフェヒネルが非常の勞力と時間とを懸けた此著述は、諸種の事情の爲め不幸失敗に終つた。彼は其最初期した收入を得ることが出來なかつた。彼は中途にして此の失敗に歸すべきを曉つたけれども、一旦約した事業は遂に之を貫徹した。以て彼が人物を見るべきである。

千八百卅四年夏ゼーベル教授ゲッチンゲン大學に轉任となつたからして其の後任としてフェヒネルは物理學の正教授に推擧せられた。フェヒネルは家庭辭書を引受けた義務があるからとて、一旦は此推薦を辭退した。ところが朋友共が(其朋友の中には辭書の出版人なるドクトル・ヘルテルもあつた)

熱心に勸めたに由つて遂に就職することゝなつた。彼は是に於て衣食の心配は無くなつたけれども、時既に遲し、彼が是まで爲した非常なる勉强の結果、彼が精力はやがて消耗し、後ちには非常なる大病に罹つた。

此大病は彼が精神生活に大なる變動を及ぼし、其研究に新方向を與へ、彼が生涯を二分劃した重大事件であるから、之を詳細に述べやうと思ふ。然し之に先ち、フェヒネルが多方面を現はすに足る滑稽的諷刺的著述のことを、少しく記することを畧してはならぬ。

此等の著述は、上述の事業の傍ら其餘暇を以て作つたのであつて、フェヒネルが精力の餘裕を示すのみならず、實に彼が豐富なる想像、批評的才能の發露なることを現はして居る。此等は多くは當時の醫學及び自然哲學に譏刺を加へたものである。其中「月の沃度より成る證明」は、（千八百二十一年公）當時醫者が極めて廣く沃度を使用したことを譏つたものである。「現今の醫學博物學に對する讃辭」（千八百二十二年公）は治療法の數、應用等に關する醫學の進歩を諷刺的に讃したものであつて、「如何なる治療も如何なる病でも治し、如何なる病氣も如何なる治療にても治せらるゝ」と言ふが、全篇の主旨を能く現はして居る。

此等の著述は皆ドクトル・ミーゼスなる匿名にて發表せられたものである。フェヒネルは眞面目なる科學的の著述は、皆本名にて公にしたけれども、想像的のもの詩的のものには、皆

な此假名を用ゐた。而して此假名の下に現はれた著述は、上記の二書の外猶ほ數種あるけれども、煩はしいから之を記せない、然し其中には、半ば眞面目であるのもある。「死後の生活」の如きも、最初は此假名の下に發刊せられたけれども、二版には本名を以て出たしたのは、其中の思想が實際に彼が眞面目のものになつたからである。

フェヒネルは詩趣に富み、頗る詩人リゥッケルトを喜び、また自ら作詩をした。其病中に成りし抒情詩の小冊子千八百四十一年ミーゼスの名にて出た。フェヒネルはまた彼が性來の嗜好に加ふるに、彼が境遇上美術に親む機會が多く、從て美術の鑑識に富み、千八百卅九年ライプチッヒに催うせられたる展覽會の繪畫に對する論文は、彼が他日の大美學者たるを證明して居る。

次にフェヒネルが大病のことを述べやう。

三　病氣

前に述べた通りフェヒネルは是迄非常な强勉をした。科學の研究の外に、家庭辭書の編輯なる大事業を引受け、爲めに過度に身心を使役した。千八百三十四年には物理學の正教授となつた。此時既に精神の疲勞は現はれて來た。彼は漸く大學の講義の職務を果たすことを得た。精力は次第に消耗して來る。千八百三十五年及び同卅九年兩回保養の爲め旅行をしたけれども、只だ一時快を覺えしだけであつた。彼は益々精力衰へ、

六ケしき講義は困難となり、通俗的講義を爲すやうになつた。

狀態は益〻惡く、やがて不眠症に陷つた。然れども研究心は依然として强大であるからして閑居無爲を許さない。彼は理論的研究の如く心を勞することがないからとて、實驗的研究に從事して居た。主觀的色彩の研究の如きが是れである。

然れども此等の比較的勞力を要せない觀察も今は有害であつた。神經系統の疲勞して居るところに、劇合に多く眼を使用したから直に之を損した。今や視覺は日光を避けなければならなかつた。無論讀み書きすることも出來ない。室中に閉込んで居なければならない。色眼鏡の使用ではいけない、絕えず眼を繃帶して居らなければならない。やがて全く盲目にならんとの危險に瀕した。是れ實に千八百四十年より初まり、同四十三年の秋に至つて快方に向ひ、其年の暮には急に恢復するやうになつた。

眼病に罹つてから程なく神經衰弱の苦痛が始まり、後には消化機能の故障が起り、生命覺束なしと見えた。フェヒネルが後に此狀態を記したものは、之にて能く彼が病狀が分るのみならず、またよく彼が習慣感情思想等を現はすから、次に抄譯することゝする。

「平生精神的作業に從事し、手に筆と本を以て働く外、他人との交際、社交的娛樂、其他何事にも慣れないからして、直に非常な怠屈に苦んだ。他人より本を讀んで貰つても不滿足であつ

た。一躰單に慰の爲めに讀書するといふことは、嫌いであつたし、以前より他人の著述を讀むのは、之が自分の作り出す思想と關係があるから興味があるのであつた。然し自分の思想を作り出すことは、予が性分として、手に筆を持つて居らなければ出來ない。予は思想を筆して初て自由に之を考ふることが出來るのである。他の人より讀んで貰へば、此處彼處比較することも出來なければ、撰擇することも出來ない。他人なら斯樣な境遇に在つて、もつと樂であつたかも知れぬ。予は現に斯樣な例を見たことがある。しかし予が性分は致方がなかつた。書取らせるのも自分には非常に困難であつた。予は予が窮屈な特別な著述法を有して居た。（フエヒヲルは自ら草稿を書し後ち幾度も之を改める習慣であつた）今は病氣の爲め之を行ふことが出來なかつたから、全く仕やうがなかつた。且つ頭腦は推理の力を損せなかつたから、物を考ふることは出來るが、之を書付けないからして、心ばかりでは、之を檢べ且つ之を進めることは出來なかつた。偶々心中で之をやつて見ると、直に之を書付けないのだからして、後に之を書取らせんが爲め、其全躰部分を記憶にあり〳〵と支持して置かなければならぬ。そうすると努力が必要である。ところが此努力は無爲にして居るより有害であつた。頭の矩合は益〻惡くなつた。予は予が羞明（フエヒネルの累つた光を堪へない眼病の名）の差支なき限り、曇天に散歩し、後には夕景、或は白晝目に繃帶をして散歩をし、以て最初の一年は重に抒情詩を作つて慰んで居た。予が詩集

の大部分はかくして出來たものであつた。後ち美的或は哲學的問題に就き、予が妻に少しく書取らせたけれども、一向滿足のものは出來なかつた。以て學者としてのフェヒネルが習慣努力、及び彼が境遇の困難を見ることが出來る。

上記の困難は彼が重患の最初の時期の狀態である。眼病に對しては色々醫者の施術を加へたけれども、其効がなかつた。最後に施した一施術は、フェヒネルが身を半ば棺桶の中に入れた。千八百四十一年十二月化膿させんが爲め、三日間背に炙を施した。弱りきつて居る體に此の如き亂暴なる處置は、全く消化機能を損じ、飲食共に喉を通らなくなつた。フェヒネルは數週間全く飲食を絶した。醫師共は斯くしても猶ほ生きて居ることの出來るものであるかと不思議に思つて居た。フェヒネルは全く皮と骨とばかりになり、衰弱して臥し、正に餓死に迫り、人々も明日と思つた。然しフェヒネルは、「自分の精神は全く活潑自由であつた」と自ら言つて居る。

やがて菓物を少々食べるやうになつた。然し固より元氣づくに至らなかつた。丁度其時フェヒネルの家と少しく知合の一婦人、或る食物を用意し來り、此食物をフェヒネルの爲めに作つた夢を見たと告げた。フェヒネル怪んで食つて見たが、自に適した。此時分より彼が消化力また元氣が徐々に恢復し始め、死を免れた。到底助からぬと思つて居たのに、此意外のしかも不思議のことよりして起つた救助は、フェヒネルに深き印

象を與へた。

然し彼の病氣は容易に治らない。眼病は依然として悪く、今度は頭が非常に悪くなつて來た。フェヒネルは自ら述べて言て居る。「千八百四十二年十一月予が頭の弱りかたは極度に達して、一日中のことを回顧することさへ不可能になつたから、日記の記入も止めなければならなかつた。のみならず、他人より讀んで貰ふことも、話を聞かして貰ふことも堪へられなくなつた。しかも談話を聽くことも出來なければ、自ら談話をすることも出來なくなつた。之をすると直に頭に惱を感ずるから警戒を加へた。また自分獨りで樂むことも出來ない。何でも過去のことを考ふること、自分で努めて思想を廻ること

などすると、すぐまた苦惱の感が起つて精神の力は全然頽敗に歸してしまうかと思つた。かやうな矩合であるから、他人に接することも出來ず、全く人と隔離せざるを得なかつた。他人と話すこともわるいから知人を近づけてはならなかつた。妻との談話も已むを得ぬことにのみ限られ、有らゆる樂といふものは禁ぜられたから、非常な怠屈が襲うて來て、殆んど之を堪ゆることが出來なかつた。然し精神の能力は、かく弱つて居るけれども、其明亮は依然として以前の通りであり、且つ仕事を爲すの能力は全く破壞されて居るのに、之を爲したい欲求は依然として從前の如くであつた。

「予が境遇を困難ならしむるに他の事情が手傳つた。予が羞

明は夏の間薄暗な光は堪へらるゝやうになつて居たが、また悪くなり、闇室に閉込んで居なければならなかつた、而して時々、眼が痛み、又た齒が痛み、夜はよく休まれず、しかも最近十年間絶えず自分を惱ました頭痛は、屢々襲到つた。消化力は益々悪くなつて、少しくも食事が出來ず。また未來糊口の心配も之に加はつた、予が職は既に他人に任命されてあり、まだ決定しては居らなかつたが、恩給金は最も質朴な生活にも足ると思へなかつた。」

フェヒネルは其腦病の特徴を以て、思想の進行を意志を以て左右することが出來ざるに在りとし、思想が一事物に、しかも時につまらぬ事に附纏ひて、いくら心を他に轉じやうと思

つて力めて見るけれども、どうしても考が之から離れなかつたと言て居る。多分今日精神病學者が言ふ強迫觀念であつたらう。彼は幾度も死を冀つたけれども、自殺の罪を犯すよりは、寧ろ來世に於て、現世にて避けられなかつた苦惱を補ふと確信して居た。彼は其他色々な事を思うた。彼は今迄蛹の狀態であつて、やがて再び若返り、新しき活力を以て此狀態より出づるであらうと思うた。或は精神活力の全然頽敗に歸して居るを思うては、かやうな希望は無益であるとも思つた。或は此苦しき狀態が永續せんことをも恐れた。

彼は依然として暗室に住し、其最愛の妻よりも分れて居らなければならなかつた。半ばは斯樣な暗室に妻を留むること

の氣毒さと、半ばは談話が有害で之を避けなければならなかつたからである。彼は食卓に出づる時には、光線を避くる爲め、繃帶はむさ苦しいからとて、假面を被つて、沈默して坐し、用事は言語よりは身振で濟ました。

此病氣は二周年を越えても依然として快方に向はない、やがて三周年にならんとして居る。フェヒネルは千八百四十三年八月が最も難澁な月であつたと言つて居る。彼は日々絶望と鬪つた。彼は宗教心を以て之と鬪つた。自ら唱へた、或は隣室にて唱へた宗教的の歌は、時々慰藉を彼に與へたことがあつた。彼が忍耐、彼が諦め方、充分の嘆稱に値する、同年秋に入つて恢復の曙光が見えた。十月初旬急に腦も眼も共に快方に向うた。彼は試に光線に對して目を開いて見た、數回試みて見たが、暫時ではあつたが、白日に眼を使用することが出來た、勿論一度以前の惡さに戻つたことがあつたけれども、頭も眼も規則正しく使用を試みて、遂には良くなるやうになつた、同時に食慾も比較的早く良好に向ひ、一般に身躰がよくなつて來た。十一月の上半には、日光に散歩することが出來るやうになり、朋友へ短時の訪問も出來、夜は遮光蓋を施さずして、ランプの光に浴して坐ることが出來るやうになつた。精神の力も、勉强力も恢復し來て、書齋に坐るやうになつた。千八百四十三年の暮には、是まで盲目と思はれ、精神の全く頽敗したと思はれ、救助の見込なしと思はれた者が、全く快癒してしまつた。當時醫師

も不思議と思つて居たが、是れ疑もなく今日所謂自己暗示の作用であつたに相違ないと、ヴントが言つて居る。

フェヒネルは此意外の快癒よりして、甚深の感動を受け、言て曰く、「予は神が予に重大な事業を託し、此苦惱により、此事業に予を準備せしめたのであつたと信じた。予は既に身心に非常な力を有して居ると想像し、全世界を以前及び現今より異なりたる矩合に見るに至るべきを思つた。世界の謎は自ら解けるやうに思はれ、以前の存在は消失して、此轉變が新誕生である如く思つた」。實に此病氣の快治はフェヒネルが生活を二分し、彼が思想生活に新時期を作つた。彼は自然科學者より一轉して哲學者となり、預言者的宗教的思想家となつた。神、宇宙、現世、來世等に關する彼が從前の斷片的の考は、連絡ある圓滿なる系統に組織せられた。フェヒネルは晩年、其生涯を顧みて言つて居る。曰く、「予は坦々たる人生の夷路を來たものではない。然れども生涯を一瞥回顧せば、予は非常な災禍の爲め、此以上の災禍に罹らずに濟んだ。又た其結果として却て幸福が生じた。予は予が心に誓ひし所を凡て果たしたらんには、予は一層重大なることに於て貧弱であつたであらう」。彼は此大病に罹らずば、其期したる自然科學の研究の成功は、一層大であつたらうけれども、宗教的哲學的の思想、之に關連する研究に於て貧弱であつたらうとの意であらう。實に大患の彼を惱ますことがなかつたら、物理上の研究は進行したらうけれども、彼

の世界觀、彼の哲學を失ひ、又た精神物理學をも失ひ、彼が後の學界に貢獻した所を失ひ、一言せば、フェヒネルのフェヒネルたる所以を失つたであらう。

後半の生活、哲學時期

四、哲學的著述「死後の生活」

フェヒネルが病中、大學の講義は、彼が先任者の子ブランデスに依つて代理せられた。彼が病氣の恢復の希望は全く放棄されて居たからして、物理學の講座は、當時職を有せなかつたヰルヘルム・エーベルに任命せられた。フェヒネルは保養料年額八百五十ターレルを受け、後ち兩回二百ターレル宛增加せられた。フェヒネル病癒ゆるや、エーベル再びゲッチンゲンに歸つたからして、物理學の講座は空位となつた。然れども、フェヒネルは以前の職に就かんことを要求せなかつた。是れ多くの講義を爲すことが骨折れでもあり、且つ今や物理學に對して多く興味を有せなくなつたからである。然れども業務なくして支給のみ受くるは、フェヒネルの欲せざる所であつたからして、千八百四十六年の夏より、彼が新に思想を向けた研究の方面に對して講義を始めた。最初は「最高善」なる標題にて哲學的倫理的問題を論じ、後ち自然哲學、結局の事物、人類學、靈魂の座、身心の關係、精神物理學、美學等の諸問題に關して講義を與へた。以て彼が研究の方向を察することが出來る。

フェヒネルがかの大病以後に大に發達した哲學的傾向は、固より既に其以前より彼にあつたのである。彼は前に折々哲學的思辨に耽つたことがあつた。千八百廿五年ドクトル・ミーゼスの名の下に現はれたる「天使の比較解剖」の如きも、此傾向の發露と見るべきである。「死後の生活」は此後十年、千八百卅六年同じくミーゼスの名にて現はれた。該著の稿成りしは、前年八月ガスタインなる處なることが第一版の序文に記してある。ガスタインは南墺の山地に在つて、千八百卅五年フェヒネルが病氣の初期、保養の爲め旅行した處である。該著は乃ち此幽邃なる山地に保養中作つたものなることが分る。此著全體が如何にも詩的であつて、技巧の點より見ば、彼が著述中の一番完全なるものであると、ヴントも言つて居る。此著述の根本思想は、大なる普遍的意識があつて、人間の個人的意識も、次第により大なる他の意識の層の媒介を經て、遂には此普遍的大意識に根原基礎を有して居るといふのである。而して是よりして人間の不死を說いたものである。此思想は、彼が後ち益々確信したところであつて、實に彼が哲學の中心思想、寧ろ彼が哲學の結論とも言ふべきである。「死後の生活」の思想は、後ち彼が哲學上の思想を網羅せる大著ツェンドアフェスタの中に布演せられてある。「死後の生活」は最初はミーゼスの名にて出されたが、是れ彼が其時未だ之を彼が正統嚴肅の考とせなかつたからである。然れども後には彼が眞面目の思想となつて第

二版は彼が本名にて發行せられ、其序文に此旨が暗示されてある。故に「死後の生活」は、かの大病の前の作であるけれども、其性質上大病後の著述の群に入れて見るべきものであり、且つ彼が哲學上の著述の先驅とも謂ふべきものである。

フェヒネルが哲學上の次の作は、千八百四十八年に出版されて「ナンナ、一名、植物精神生活」(Nanna oder über das Seelenleben der Pflanzen) である。ナンナはノルス人の崇める光の神、春の神なるバルヅルの妻であつて、花の女神である。此著の根本の思想矢張「死後の生活」のそれと同一であつて、宇宙には意識の階段があり、最後に普遍的大精神がありて萬物を包有すといふ考よりして、植物も精神があると論じた美しき著述である。

千八百五十一年フェヒネルが哲學上の大著述「ツェエンドアヴェスタ一名天と來世の事物」(Zend-Avesta oder die Dinge des Himmels und des Jenseits) が公にせられた。ツェンドアフェスタは元と波斯の聖者ツオロアステル(或はゾロアスターともいふ)の教義を載せたる經典の名であつて、「活語」の義である。フェヒネルは之を假り、以て自然宇宙を活かす言葉の義に用ゐたのであらう。

ツェンドアフェスタにはフェヒネルが全哲學全思想が網羅されてある。彼が後の著述の內容は、少なくとも胚種の形にて此書に包含されてある。否な、寧ろ其後の著述はツェンドアフェスタの說の解釋、經驗的事實法則を集めて此說の固めとなし、此說に確乎不動の基礎を與へんと企てしものと見るべ

きである。彼が精神物理學の結局の目的内容も、疑もなくッェンドアフェスタと同一であると、ヴントは主張して居る。

ナンナ及びッェンドアフェスタの現はれた時は、丁度時勢、時代の精神が、此書を歡迎し、フェヒネルの考を了解するに頗る都合が悪るかつた。獨逸國民は其自力を自覺し、其發展隆盛を計るに熱中し初めて來て、言はゞ國民に魂があると感じ初めた時であつて、ナンナ中に說げる小植物に魂があるなどに心を傾ける餘裕はなかつた。偶々之に注意するものがあつても、魂あり靈ある花を折つたとて心を痛める情脆き婦人、さらずは、フェヒネルも分の分らぬことをいふ男だと頭を振る科學者であつた。而してまた當時ヘーゲル哲學、一般に思辨哲學既に衰へ、世は科學的、經驗的、唯物論的傾向の時代となつた。フェヒネル自身は是迄思辨哲學に反對して、經驗科學の爲めに戰つた、又た是からも絶えず熱心に之と闘つた。然るにッェンドアフェスタは既に其標題が「天と來世の事物」とあつて、經驗の範圍、科學研究の對象を超越して居る。實にフェヒネルは此書に於て經驗に止らずして、之を超越して形而上學に移り、自然を以て、神、或は精神的統一となすに至つた。自然科學者は之を喜ばない、彼等は宇宙を以て機械的仕掛となさんとして居る。然し是に於て彼等自身も既に經驗を越えたる形而上學に移つたことを覺らない。彼等は只だフェヒネルが宇宙を以て靈となし神となすのが氣に入らない。科學者多くはフェヒネ

ルを以て妄想家となして、彼の自然研究を信用せない。また哲學者は元からフェヒネルが敵であつたから、彼の著述を顧ない。斯樣なのが當時の狀態であつた。フェヒネルの著述は一向重んぜられなかつた。後ち時代の傾向が哲學にも興味を有つやうになり、カントに歸れの聲が出づると共に、唯物論の一方に偏して居ることも知られ、フェヒネルが精神物理學なる新科學を創始して、科學者の信用を恢復するやうになつて、彼が著述は驚嘆を以て讀まるゝやうになつた。

フェヒネルは彼が著述に對する世間の冷淡の爲に決して落膽せない。彼は彼が說を深く信じて居た。彼は彼が確信、彼が依て以て安身立命福祉を得た確信を、如何にしても世に廣めんと決心した。彼は法を變へ手を換へ彼が說の流布を計つた。彼は先づ小冊子が彼が說の理解流布に好都合ならんを信じて、千八百五十一年「精神問題に就て」なる書を出した。彼は其序文にかう言つて居る。「舊見の寢臺より全く起き上がらない公衆に對して、予は最初予が「死後の生活」を以て「起きよ」と絕叫した。世人が予が言を聽かないからして、予は再三「起きよ」と叫んだ。予今まで此に五度絕叫する。予は予が命のあらん限りは、六度でも七度でも「起きよ」と叫び、只だ何時も同一の「起きよ」と聲があるであらう。」フェヒネルは千八百六十三年「信仰の三動機及び三理由」なる書を出し、千八百六十六年彼が本名を以て「死後の生活」の改版を出した。千八百七十三年「有機體の創造及び進

化に對する意見」が現はれた。何れも彼が哲學の敎理を廣めんとの同一の目的より出來たのである。

五　精神物理學及び美學

千八百六十年フェヒネルが創始した有名なる科學の著「精神物理學原理」(Elemente der Psychophysik) が現はれた。彼が說に依れば、凡て精神的現象は物理的現象の他の反面である。精神的運動があれば、之には必ず物理的運動が隨伴する。然れば物理的手段を以て、如何に精神的運動を測定することが出來やうかといふのが、フェヒネルが精神物理學の根本問題である。彼は實に一歩を進めて、科學が探求し認識する宇宙の法則なるものは、同時に精神的出來事の法則であると信じて居たのであつた。物質的なるものを以て、精神的事件を嚴密に測定せんこと、換言せば、精神的運動を測定せん爲め、精神現象に隨伴する有形的運動を測定するのが、精神物理學の問題である。彼は之を以て精神と身體との關係の嚴密科學を立せんとしたのである。其考察の純粹に經驗的なる、其方式の周密にして實驗的なる、しかも數學的に法則の確立を計るなど、全く嚴密科學である。彼が精神物理學は、實に今日の實驗心理學の基礎を作つたのである。然るに驚くべし、彼が此科學的著述の目的は、彼が哲學を證明せんとの企てあつて、其根本思想に於ては、ツェンドアフェスタと同一である。予は後にフェヒネルが哲學の說明の處に之に關して少しく述べやうと思ふ。

フェヒネルが創始した新科學に對しては、世評が色々で有つて、有力な學者の反對も尠なくなかつた。ヘルムホルツの如きも反對者の一人であつた。フェヒネルは後には細かな點に於ては改善を加へたが其重大なる點に於ては死に至るまで之を固守し、高齢に達しても青年の如き元氣、驚くべき敏捷熟達を以て、群がる敵に對して應戰した。やがて彼が味方も出來た。猶ほ同科學に關する著述「精神物理學に就て」(In Sache der Psychophysik)は千八百七十七年に現はれ、最初の爭論文であつて、ヘルムホルツを筆頭とする幾多の大家の駁論に對して自説の辯護である。千八百八十二年「精神物理學要點の校正」(Revision der Hauptpunkt der Psychophysik)が現はれ、反對者の諸説をも考量して彼が立脚地を明にし、同時に品切となつた最初の著述の補充に供した。同年又た「精神物理學の問題に關して」の論文を公にした。最後に、彼が生活の終の年、八十七歳の老人、智力毫も衰へず、「心象測定原理及びエーベル法則に就て」の論文を草した。ヴント此論文を以て「フェヒネルが四十年間從事して居た問題の最も明瞭なる最も完全なる叙述」であると評して居る。

千八百七十九年ヴント、ライプチッヒに實驗心理學の研究場を初て設立し、フェヒネルが簡單なる實驗方式を基礎として研究を始め、以て斯學を今日發展の域に至らしむるに大に効があつた。當時フェヒネル、ヴントに戲れて言つたとのこと

である。「君がそんなに大袈裟に此事をやるなら、君は數年にして精神物理學を完成するだらう。」其後やがて實驗心理學の無數の研究者が生じ、他の大學に於ても心理學の實驗場が出來たけれども、フェヒネルが期した精神物理學其物は完成せない、寧ろ一層活潑なる他の科學が此より生れた。フェヒネルが簡單な仕懸で助手もなく自分獨りで試つたことを、今は無數の實驗場に於て無數の熟練なる專門家が、有らゆる輓近の精巧なる方便を以て之を行つて居る。然れども皆んながフェヒネルを以て其科學の開祖と仰で居る。フェヒネルは實に其精神物理學を以て、此偉大な今後益々發展すべき實驗心理學の基礎を据へたのである。ラスヴィッは言つて居る。「コロンブスは東印度に到らんが爲め出發した。彼は此に到らなかつた、彼は彼が求めた以上のもの、即ち新大陸を發見した。後世にして初て彼が事業の全範圍を測知することが出來る。彼が名譽功績は、米陸が彼が目的の途中にあつたからとて、毫も減じない。耿眼、勇氣、精力が彼が手段であつたからである。フェヒネルに於ても同樣である、彼は感覺の測定を求めんが爲めに出發した。彼が得しものは恐くは彼が知らんと思つたものでなかつた。恐くは其以上である。彼は新科學實驗心理學を發見したのである。是れ彼が不朽の事業、只だ後世にしてまた初て其大さを測定することが出來やう。此新領土の探索殖民は、今ま漸く始まつたゞけである。」

ヴントもフェヒネルが此學の創始を評價して言ふ。「フェヒネルが事業の永久に傳はるべきは、彼が最初に精神生活の探究に嚴密なる方式嚴密なる測定の原理及び實驗的觀察を引入れ、以て嚴格の意味にて科學的精神學を初めて可能に爲したことである。既に此目的はヘルバルトに夢見た所であつたけれども、彼は此目的に至るべき道を失した。生理學者もヨハネス・ミュラー以來色々身心の關係に就き研究し、個々の點に於ては既に闡明した所があつたけれども、全般の問題に對して明白なる考を有せず、又た嚴密なる方式の發達を考へなかつた。フェヒネル初て能く、最初は特別の問題に限られて居たが容易に廣き範圍に應用さるべき彼が精神物理的測定法を以て、精神生活の嚴密なる探究の道を開拓した。フェヒネル自身に於ては、此問題は全然哲學的思想より出でたのであつた。而して此哲學的思想の有効證明の爲め、只だ補助として之を見て居つた。從て此學の價値と範圍とを輕視して居た。故に彼はあの哲學的目的がなければ、精神物理學の方式は、心理學のつまらぬ附屬に過ぎぬと思つて居つたらしい。今日吾人は、彼が研究が變り易き哲學上の考より獨立して居つたことや、從て之が爲め心理學が哲學上の爭論より獨立した實驗的科學になつたに、彼が大に貢獻したこと等を以て、彼が功績と認めて居る」。

ヴント又た精神物理學に關してフェヒネルを稱贊して言

て曰ふ。フェヒネルが有した才能の稀なる結合が、彼が他の科學的研究の何れに於ても、彼が精神物理學の研究に於けるが如くに立派に現はれて居るものはなからう。「精神物理學原理」の如き著述には、嚴密なる物理數學的方式の熟達、同時に人間の最も幽玄なる問題を沉思する傾向が必要である。彼は之に加ふるに思考の獨創を以てし、以て自己の必要に應じて縱横自在に在來の方便を改め、新奇の慣れざる道を踏むに毫も躊躇する所がない。エーベルの觀察は、其簡單の故を以て驚くべきものであるげれども、實に狹き觀察であつた。他の生理學者の研究及び其結果も個々分離して居り、一定の目的あつてでなくして、寧ろ偶然の發見である。フェヒネルは此等のつまら

ぬ材料よりして新科學を建立したのである。彼自身が觀察の非常に貴重なる所は、其實驗の根本的、秩序的遂行にあるのである。然れども彼が用ゐることの出來た方便が乏しく、又た補助者なくして全く單獨に働かざるを得なかたが爲め、問題の解明は僅少に止つて居る。然し散慢不完全なる材料よりして明亮精確の方式を創造したことは、今日の科學が示す最大事業の一である。是まで客觀的測定のみに應用せられた計算の原理を、主觀的知覺の範圍に用ゐたといふことが、其目的は姑く措き、非常に學問上興味あることである」。

フェヒネルが美術に熱心な興味を有して居たこと、文學を好み自ら作詩をも試みたこと等は、前に既に言つた。彼は學者

として研究に熱心なるに從ひ、美術に對する嗜好は美的批評の形を取るに至つた。精神物理學の研究も結末に近づき、從て精神現象を科學的に研究する方法をも熟達するに至つたからして、今度は美術が彼が研究の對象となり、一時全く美學に其考究を盡した。而して彼が精神に潜んで居た美術心は、彼が境遇上絶えず培養せられつゝあつた。彼が兄エヴァルトは畫家である。彼が甥、姪女、また美術家であつた。其親友の中には、本屋の主人ドクトル・ヘルテルがあつて、美術を喜び美術を解し、其家は、市及び其他よりの美術家、美術嗜好者の集會所であつた。又た彼が親友のヘルマン・ヴィセは、其多くの著書中、美學の著述を以て最も有名である。斯の如く彼が境遇は、彼が美術心の養成、美術の研究には好都合であつた。而して何でも彼が興味を有する事物に法則を發見しやうとの性來の傾向は、今や美術の方面に向つた。

千八百七十六年遂に「美學初步」(Vorschule der Aesthetik) が現はれた。凡て認識は實驗的歸納的でなければならぬといふのが、彼が從來一般の研究の規則であつた。彼が美學も從て實驗的歸納的、一言せば科學的であつて、從來の理想的學派的美學とは全然趣を異にして居る。而して人の倫理的行爲のみならず、一般の活動も、快感の最高程度を得んとする努力に、意義があり價値があるといふのが、彼が說であるからして、彼が美學も、純粹に此快感標準の研究である。從て彼が美學は、其方式

及び問題の範圍も狹少である。然れども、彼が在來の理想的哲學的美學より離れて、心理的經驗的方法を美の研究に用ゐた所が、彼が美學の偉大不朽なる價値である。丁度彼が精神物理學が今日の實驗心理學の基礎を爲したやうに、彼が美學は今が研究眞盛の心理的美學の基礎を爲したのである。彼が美學は、後の研究に幾多の有益なる刺戟を與へ、現今の美學の幾多の胚種を含み、嚴密な實驗科學の手段方便を、極めて複雜なる人間の經驗に引入れ、以て今日の美學の濫觴を爲した所が、彼が偉大なる功績である。フェヒネルは云爲する毎に常に事物の創始者である。

千八百七十七年「闇夜見に對する白晝見」(Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht) なる著述が出た。フェヒネルは既に齡八十を越えたる老人として、彼が是れまで發表した在來の諸種の著述の總合を一書に纏めて、彼が哲學的宗教的の中心の立脚地より之を說明する必要を感じたのである。宇宙は靈である、精神である、神であるとの彼が見解を白晝見と名づけ、精神は一定一時の存在なる人間動物の個々の主觀的中心に腦髓の如き附着し、世界は死んだ物質であるとの通常の世界觀を闇夜見と名づけたのである。

六　フェヒネルと降神術

「死後の生活」を一讀した人は、フェヒネルが上述の如く科學的實驗的傾向が甚だしいにも係らず、彼には之と反對の神秘

的傾向があるを認めざるを得ない。一般に彼の如き宗教的感情があり、詩的傾向のある人は、神秘に流れ易い。而して神秘的の人は降神、千里眼、思想傳達、幽靈等の現象を信じ易い。之が妄信を制するのは理性の力である。「死後の生活」及びッェンドアフェスタには、死人の靈が地上に生存することを說ぎ、降神千里眼等の可能をほのめかしてある、故に人往々フェヒネルを以て妄想者と爲した。彼は動もすれば妄想者とならん危險に走つた。然れども彼は元來妄信を制する理性に富み、鋭利なる批評的頭腦を有して居た。故に彼は容易く實際に妄想家とはならなかつた。彼は學理的には降神術等の現象の可能を信じて居たけれども、之が實事と稱するものには、容易に耳を傾けなかつた。

彼が學說が降神說と類似の點があり、神秘的のものがあるからして、神秘的傾向を有し、或は神秘的の說を唱ふるものが、往々フェヒネルに不可思議の實驗目擊を促した。殊に千八百七十七八年の頃には、屢々降神術の實驗に招がれた。然れども彼は彼が學說の證明には、此の如き魔術幽靈の現象の補助がなくとも、精神物理學を以て立派に成功したと信じて居た。故に彼は、斯の如き招待は何時も謝絕した。ところが、フェヒネルが同僚で親友なる天文學者ッェルネル、一日、當時有名であつた亞米利加の降神術者スレードを携へ來て、實驗を施さした。物理學者ヱーベル、數學者シュナプネル、其他の同僚も之に臨

むことゝなつた。フェヒネルも今度は出席した。フェヒネルは最初より一般にかやうな施術の正規を信ぜない。彼は之を以て施術者の詐僞手段であるか、或は幽靈が實際に働くのであつても、未來世の病的不健全な狀態より起るのであると信じて居た。此時施術者、最初は机の下にて幽靈に字を書かせることや、机や椅子を動かさせるといふ事等を行つた。フェヒネルは信仰に於ても不信仰に於ても、一樣に用心深い人であつた。彼は之を以て全く奇術師の興行と一視した。然るにやがて、ツェルネルが竊に長く信じて居た事柄が起つて、ツェルネルは大に感動し、覺えず涙を流した。是迄疑心に充ちた傍觀者も、其疑が動搖した。ツェルネルは四のヂメンシオンを有する幽冥界があるといふ彼が假定を證明せんが爲め、紐の兩端を封じて、中の結を解かしめんと試みた。ところが是が見た所では立派に出來た。エーベル及びフェヒネルも此實驗を有効とした。ツェルネルは非常に感動したけれども、フェヒネルはいやいやながら事實を承認した。彼は、之が事實でありとすれば、此現象のつまらぬことは、彼が想像して居た幽冥界を大に貶することゝなり、また彼が死後の生活の考と全く相反して居る。是れ大に彼が不快とする所であつた。彼は彼が顏前に起つた此實驗の證據を否定することは出來なかつたけれども、是れ常規外の病的出來事であつて、之を以て來世に對して惡き見解を抱いてはならぬと思つて居た。故に「白書見」の終に臨て言て

曰く、「白晝見は降神術があつても無くても成立する。然し是があるより、無き方が宜い。白晝見は重大な點に於て降神術と一致し、之に支を得ることが出來るけれども、否な或る點までは實際に之に維持を求むるけれども、降神說は其非常規を以て白晝見のみならず、吾人が從來の認識の全組織に紊亂を來たさしむるものである。」フェヒネルは同樣のことを、既に「死後の生活」にも言つて居る。（死後の生活第十章、九十七、九十八頁參照。）

フェヒネルは彼が生涯を通じて、彼が世界觀の證明を得んと努力して居たのである。降神の目擊の如きは、彼が說を維持するに最も好都合のものである。然るに彼は、彼が說の證明となるべきものを容易に信ぜざるのみならず、自ら決定的と見ざるを得なかつた實驗の價値をも、積極的に見ずして、消極的に見たといふことは、彼が研究的態度の客觀的なるに驚かざるを得ない。然れども、彼は此實驗の無効なるを反證することが出來なかつたから、從て他の降神的現象も、詐欺でなく、在り得べきものであるを許さゞるを得なかつた。是れ彼が元來全然僻見の無きにも依るが、一は彼自身正直の人であつて、正直の容を爲せる施術者を、普通の詐僞師と見ることが出來なかつたからでもあらう。後ち施術者スレードが僕の寡婦の發表せし所に依れば、スレードは矢張普通の詐僞師であつて、奇術を行ふたものであつたとのことである。

七　晩年、爲人、習慣